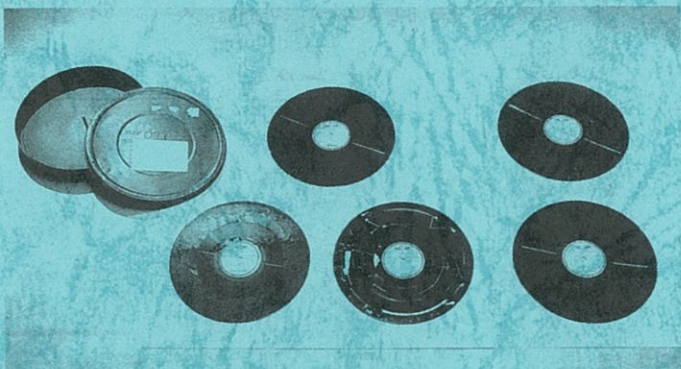


北伊予の伝承

第13集



松前町東公民館



玉音放送の原盤

I 座談会「戦後七〇年北伊予のくらしを辿る」

今年は太平洋戦争終結から七〇年を迎えた。宮内庁は天皇がラジオで終戦の詔書を読み上げた「玉音放送」の原盤レコードを初めて公開した。

「玉音放送」は、昭和二〇（一九四五）年八月一日正午ラジオで放送された。多くの国民にとって青天の霹靂であり、ほとんどの国民は降伏という事態への心構えはできていなかった。

放送の前日、一四日午前一〇時から開かれた御前会議で、ポツダム宣言受諾を決定したその日の深夜、宮内省内仮執務室で天皇自らによる終戦の詔書の録音が行われた。その録音盤は万一を考え宮内省侍従室内の金庫に保管された。原盤は二枚一組と三枚一組があり、左上にそれが収納されていた容器の缶が写っている（写真）。

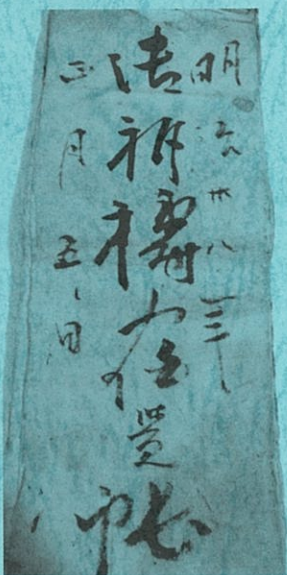
II 御祈禱

御祈禱は、組祈禱ともいい、神職が住職を迎え組中安全や五穀豊穰を祈願し、その後懇親会を行いコミュニケーションを図る新春の行事である。かつては「お日待ち」、「氏神講」ともいわれた。

藩政時代、北伊予九地区（大字）は松山藩に属し、それぞれが「村」として自治活動を行い、御祈禱という年中行事も現在まで脈々と独自の内容で継続されてきた。

その起源は分らないが、祈禱時に転読する「大般若波羅秘多經」を一八二〇年前後の文政年間に購入したという記録が複数の地区にあることから、その頃かと思われる。

出作・鶴吉・横田・大溝地区などでは、古くから御祈禱の記録が「覚帳」、「入用帳」として残されている。これらの資料は、それぞれの地域の時代を映す貴重な記録である。



御祈禱宿覚帳（出作）

発刊にあたって

『北伊予の伝承 第一三集』をお届けいたします。

昭和六三年に創刊された『北伊予の伝承』は、第一集の北伊予の「年中行事」や「作業唄」などの編纂をはじめとして、これまで地域に伝わり、受け継がれてきた様々な出来事や奉りごとなど、数多くの題材を取りまとめ発刊してまいりました。

今回は、これまで幾度となく取り上げてきた戦争について、戦後七〇年という節目の年を契機に、戦争がもたらした苦しい体験や悲しみの記憶を風化させることなく後世に伝えられればと、北伊予各地区の有志の方々から当時のお話を座談会形式で伺い「I 戦後七〇年北伊予のくらしを辿る」としてまとめました。

また古くから先人より受け継がれ、今なお北伊予各地で行われている「御祈禱」を題材に、各地区から推薦された編集委員を中心に、地区ごとに提供していただいた資料や聞き取りをもとに、御祈禱の内容や移り変わりなどを「II 御祈禱」としてまとめております。

本誌の発刊にあたり、猛暑の中 座談会に御出席いただき、貴重な体験をお話いただいた皆さま方、貴重な資料や写真を御提供いただいた多くの方々に、心から厚く御礼申し上げます。また終始熱心に企画・執筆・編集等の作業に当たられた編集委員の方々に敬意を表します。

最後に、本誌が北伊予の皆さまの郷土理解や地域の伝統文化向上に少しでもお役に立てば幸いです。

平成二八年三月

松前町東公民館長 門田 博

目

次

I 座談会

「戦後七〇年 北伊予のくらしを辿る」

— 明日への希望を抱いた昭和二〇年代 —

一 戦時中のくらし	3
二 終戦後間もないころのくらし	16
三 昭和二〇年代後半のくらし	28

II 御祈禱

御祈禱とは	39
-------	----

各地区の御祈禱

一 徳丸	40
二 中川原	42
三 出作	44
四 神崎	48
五 鶴吉	51
六 横田	55
七 大溝	58
八 東古泉	62

編集委員	66
------	----

I
座談会

「戦後七〇年北伊予のくらしを辿る」

— 明日への希望を抱いた昭和二〇年代 —

今年は、戦後七〇年の節目の年に当たります。戦争体験者や遺族の方、学徒動員に駆り出された皆さんも高齢になられ、「今」を逃しては、お聞きする機会を逸する恐れがあります。

そこで編集委員会では、北伊予各地区から有志の皆さんにお集まりいただき、猛暑の七月一二日東公民館において「戦時中」、「終戦後間もないころ」、「昭和二〇年代後半」それぞれのくらしをテーマとして座談会を行いました。これからの内容は座談会でのお話をまとめたものです。

座談会出席の皆さん（敬称略）

17	非農家	神崎	深沼 静良
16	非農家	東古泉	丸山 和子
15	非農家	鶴吉	西影 順一
14	農家	東古泉	三好 健二
13	農家	永田	渡部 朝明
12	農家	横田	篠崎まゆみ
11	農家	徳丸	伊賀上勢子
10	農家	神崎	水口 孝雄
9	学徒動員（男）	神崎	高石 明男（紙上参加）
8	学徒動員（女）	大溝	二宮 弘子（後日取材）
7	勤労働員（男）	大溝	升田 守（後日取材）
6	疎開定住者	徳丸	田中 孝
5	疎開定住者	出作	神野 英隆
4	引揚者	神崎	武市 公子
3	遺族	永田	藤野 玉男
2	戦争体験者	徳丸	八束 兼福
1	戦争体験者	鶴吉	松田 英一



座談会出席の皆さん（敬称略）

丸山	西影	深沼	三好	渡部	篠崎	水口	升田	二宮	（後列）
神野	田中	武市	藤野	伊賀上	松田	八束			（中列）
									（前列）

司会是高石・仙波、記録は澤田・伊藤・濱川、写真は田中の各編集委員が担当しました。



座談会スナップ



一 戦時中の暮らし

戦時中とは、昭和一六（一九四一）年一二月の太平洋戦争勃発から二〇（一九四五）年八月一五日の敗戦までの四年に満たない期間である。その期間は非常事態の連続で、世相も一変しました。

戦争が激しくなると日本国内では国の総力を挙げて戦争を遂行する態勢が作られました。昭和二三（一九三八）年に「国家総動員法」が制定され、国民を動員して物資と労働力を軍需生産に振り向けました。

また「欲

しがりません勝つまでは」「贅沢は敵だ」の合言葉のもと、全て国家統制の抑圧された窮乏生活（きゆうふく）を余儀なくされ、食糧や衣類などの生活物資は切符制による配給（注一）となりました。



写真1 戦時中の子ども
（松山市平和資料館をつくる市民の会「第12回平和展」より）

戦況の劣勢の中、昭和一九年には旧制中学校・女学校などにも「学徒動員法」が施行され、生徒たちは授業を停止し軍需工場へ動員され、また開墾や農作業のため勤労動員されました。さらに空襲に備えた防空訓練や軍事教練も行われました。

まず、「戦時中の暮らし」では、皆さんが体験されたり聞かれたりした窮乏時代の暮らしについて、お話をいただきたいと思っています。

（二）自己紹介と戦時中特に印象に残っていること

司会 本日まで出席いただいたお一人お一人から、自己紹介と戦時中、特に印象に残っていることについてお聞きします。まず、戦争体験者のお二人からお願いします。

松田 鶴吉の松田英一です。大正一四（一九二五）年八月三十一日生まれの八九歳です。北伊豫尋常高等小学校を昭和一三年三月に卒業し、青年学校の時、対空監視ということが始まりまして兵隊に行くまでその任に就いていました。これは北伊予、南伊予、岡



田、松前、郡中、南山崎、北山崎の各地区が交代で八人が一組になり二四時間、航空機の監視をしました。

その後、昭和一九（一九四四）年九月九日九時一分発の国鉄（現在のJR）で北伊豫駅から大勢の人たちに見送られ出征しました。その中には村長さんをはじめ国防婦人会の皆さんもいました。父親は何も言わずに見送りに来ていました。

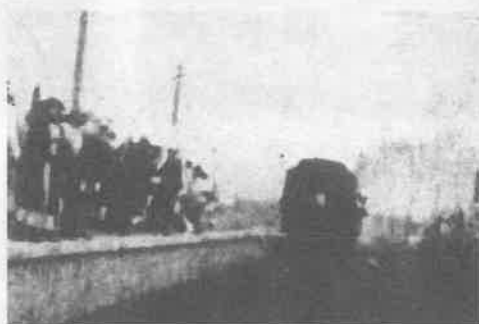


写真2 北伊豫駅での出征兵士の見送り
（『遺勲と追想』より）



丸亀の歩兵部隊に入りました。丸亀に一週間ほどいて行先も知らされず夜出発し、終戦まで中国大陸で陸軍の兵隊として一生懸命つとめました。

八束 徳丸の八束兼福です。昭和四（一九二九）年生まれの八六歳です。北伊豫尋常小学校初等科入学が昭和一〇（一九三五）年、一二年が

支那事変(日中戦争)、一五年が紀元二千六百年の式典がございまして、一六年が太平洋戦争の真珠湾攻撃で、これが強烈に残っております。

司会 遺族として御出席いただいた方、よろしくお願ひします。

藤野 永田の藤野玉男です。生年月日は昭和一八(一九四三)

年二月三〇日です。年末の正月の餅を搗くときに生まれたそうです。年齢は七一歳です。

父は昭和一八年七月一日丸亀に入隊し、その二四日ビルマ(現在のミャンマー)に出征しました。昭和二〇年七月三〇日、ビルマのテ

ンガピン西方において戦死いたしました。享年二九歳でした。当時私は一歳七か月でありましたので何も分かりません。家族は母と姉二人、祖母と私の五人家族で、農業で生活しておりました。

司会 外地からの引揚者の方、よろしくお願ひします。

武市 神崎の武市公子です。昭和一四(一九三九)年、満州(現

在の中国東北部)吉林省公主嶺生まれの七五歳です。終戦を迎えたのが六歳のときでした。

名前の公子は生まれた地、公主嶺の「公」から付けたそうです。父は軍人で満州にいたので、その頃の日本の様子は分かりません。引揚げ

の関係は後で話をさせていただきます。

司会 北伊予に疎開されたあと定住された方、よろしくお願ひします。

いします。

神野 出作の神野英隆です。昭和八(一九三三)年生まれ、八二歳です。昭和一五(一九四〇)年に新居浜の尋常小学校に入学いたしました。昭和一六年に父親が海軍に召集されまして、



昭和一八年国民学校四年生の時に松山の伯母を頼って松山の東雲国民学校に転校いたしました。

昭和二〇(一九四五)年の松山大空襲の直前の七月に出作の伯父を頼って疎開いたしました。北伊豫国民学校に転校し、八月に終戦を迎えました。戦争の落とし子というべき時代の国民学校を過ごしました。

戦時中のくらしの中で強烈に印象がありますのが、昭和二〇年に入ってからアメリカの戦闘機の空襲が頻繁になりました、その都度警報が発令されますが、その際集団下校するわけでありませんが、ある時一機の戦闘機が集団下校中の児童に機銃掃射(機関銃などで、なぎ倒すように続けざまに撃つこと)を浴びせてきました。幸い被害はありませんでしたが今當時を振り返ってみても恐ろしいことであつたと思っております。



田中 徳丸の田中孝です。生年月日は昭和一〇(一九三三)年九月で八〇歳です。生まれたのは、神戸市の長田です。アメリカの戦闘機と出会ったのが昭和一八年の夏です。その後、北伊豫に弟、妹と一緒に疎開しました。

司会 家の生業が農家の皆さん、よろしくお願ひします。

水口 神崎の水口孝雄です。生まれは大正一五(一九二六)年

二月で八八歳六か月でございます。尋常小学校に入つたのが昭和八年です。昭和一五年一二月の繰上げ卒業です。

當時は米の強制権限(供出)が発動されまして、仕事で中山、広田の方へ行き米蔵の調査をしたことがございました。

伊賀上 徳丸の伊賀上勢子です。昭和五(一九三〇)年生まれ、八五歳です。尋常小学校初等科、高等科を経て青年学校に入りました。



たが、二年時に廃止になりました。もう一年行けば新制中学の資格が得られるという事で通いました。戦争中はいろいろありましたが、後でお話させていただきます。

篠崎 横田の篠崎まゆみです。生年月日は昭和五(一九三〇)年九月二〇日です。もうすぐ八五歳になります。

渡部 永田の渡部朝明です。生まれは昭和一一三(一九三八)年一〇月で七六歳です。国民

学校入学が終戦の時でした。国民学校の怖さは身に染みて感じてはおりません。戦争の記憶があるのは、防空壕(空襲のときに待機するため地面を掘って作った穴や地下室)へ入ったこと、それと終戦直前だったと思いますが、松山空襲の時にちょうど家の裏へ出ると重信川の松越しに松山の街が赤々と燃えていました。戦争とはこんなものかと思いました。戦争の怖さを体験した生活をしておりませんので、言葉では理解できても実際の怖さが実感できていない子ども時代を過ごしました。

三好 東古泉の三好健二です。生年月日は昭和一一四(一九三九)

年四月一日です。今年で七六歳になります。

終戦の時に国民学校に入学しました。学校のセンドンの木のそばに大きな防空壕があったのを覚えています。自宅は伊予高校のグラウンドの近くで、六歳になったばかりで学校までは三キロ以上あつてしんどいし、三年生ころまではよく休んだことを覚えています。

家には塀の外に防空壕がありました。祖父が掘ったものです。中には畳を敷いて、壁と天井には板を使い、その外にむしろを掛けて上から土で固めました。上には野菜を植えた

りして隠していました。かがんで入れるほどの入り口で、家族五人が入れる二畳ほどの広さじゃったるかと思ひます。雨が降ったら水が溜まります。実際の避難には使わずにすんだと思ひます。

松山空襲の時は、当時は今よりもだいぶ大谷川の土手が高かつたんで、土手で空襲を見たという人も何人もおつたが、今思うと避難の途中じゃったるかと思ひます。

司会 公務員や自営業など非農家の皆さん、よろしくお願ひします。

西影 鶴吉の西影順一です。昭和二(一九二七)年生まれの八八

歳です。国

民学校最初の卒業生で

す。伊豫神社に昭和八

年に個人から寄進されたとい

う立派な神馬の銅像があり

ましたが、昭和一八年に

金属の強制供出で撤去され

ました。

丸山 東古

泉の丸山和

子です。昭

和一二(一九三七)生まれの七八歳です。戦争

の時に印象に残ったものは、松山空襲と登校

中に空襲があつたことなどです。

深沼 神崎の深沼静良です。昭和一四年(一九三九)生まれで七六歳です。昭和二〇年に国民学校に入学しました。本当の戦争の怖



写真3 供出した伊豫神社の神馬と寄進者
(伊豫神社社殿の掲額より)

さは知りませんが状況は覚えております。例えば学校で空襲警報が出ますと集団下校するんですが、一年生の私が見当たらず帰宅していなかった。私は記憶にはないのですが、後で父や兄に聞いたところでは、校庭のイモ畑にうずくまっていたということです。

(二) 勤労働員や学徒動員について

勤労働員や学徒動員を体験された升田守さん、二宮弘子さんのお二人は座談会当日、都合で欠席されましたので、後日大溝公民館でお聞きしたものをここに掲載します。

また旧制中学三年の時、新居浜に学徒動員された神崎の高石明男さんにも紙上参加していただきました。

司会 まず、升田さん、二宮さん、生年月日と年齢や学徒動員などについてお話しください。
升田 大溝の升田守です。



生年月日
は昭和四
（一九二
九）年一
一月一二

日です。今年八五歳です。私は自分の人生をノートに記録しています。

小学校の一年生が昭和一一（一九二二）年、六年生の時に太平洋戦争が始まりました。その後北伊豫尋常小学校高等科を卒



写真4 災害地へ勤労働員した北伊豫中学生
（高石明男氏提供）

業して、昭和一九年四月に県立松山農業学校（松農）に入學しました。一六歳の二年生の時に、現在の松山市正岡地区の灌漑用ため池の土手が決壊して、土手を修復するために当時の獣医畜産科の生徒が大和田先生の引率のもと勤労働員に行きました。期間は一か月ほどでありましたが、モッコ（土などを運ぶ縄を網目に編んだ道具）に土を入れまして、それを運び土手を修復する作業です。もちろん泊まり込みで、炊き出しは婦人会がやってくれました。今思うとその当時の勤労働奉仕で社会性というものが養われたのではないかと思っております。



二宮 同じく大溝の二宮弘子です。昭和五（一九三〇）年生まれの一八五歳です。昭和一七年に南伊豫尋常小学校（現在の伊予小学校）を卒業し女学校へ入り、三年生（一五歳）のとき学徒動員で西条市の倉敷紡績へ行きました。午前中は授業があり、午後は糸を紡ぐ作業をしました。食べるものがなく、食器は竹のお茶碗とお箸で、かんころ（イモを乾燥させ粉にしたもの）餅の黒いのが一つ、それが毎日の粗末な食事でした。

その間、父がリュックサックをかるて汽車やバスを乗り継いで、いろんな物を差し入れにきてくれました。それを部屋に者皆んなで分け合って食べました。

帰郷しましたら空襲で学校が焼失しており、松前国民学校を借りてそこへ通いました。

司会 当時上級学校へ進学するのは、何人くらいでしたか。

二宮 一〇〇人中二〇人くらいでしょうか。

司会 学徒動員に行く人はどういう形で選抜されましたか。

二宮 全員です。身体の弱い子は学校に残っておりまして。クラスで一人か二人ぐらいで、残りは全員強制的に動員されました。

私は済美女学校だったので西条市の倉敷紡績へ、県高女（現在の松山南高校）（注2）と城北高女（現在の松山北高校）は、今治市へ動員され、激しい空襲に遭い犠牲になられた方もいました。

司会 女学校の卒業は何年で
すか。

二宮 昭和二十二年三月です。

司会 女学生でありながら学徒動員させられる気持ちはい
かがでしたか。

二宮 何も考えず、先生の言うとおりの「お国のために」という
ことで疑問を持たなかったですね。

司会 升田さん、進学された松山農学校にはどのような学科
がありましたか。

升田 農学科が二クラス、林業科、養蚕科、獣医畜産科です。
私は獣医畜産科に入りました。

司会 学校の様子を話していただけませんか。

升田 松農には実習田というのがあり、また馬がおりまして
獣医師としての勉強が多かったですね。上級学校へ行つて獣
医師になった者が数名おりました。

司会 紙上参加していただいた高石さん、自己紹介を兼ねて
戦時中のことについてお話ください。

戦時中のことについてお話ください。

高石 神崎の高石明男です。昭和四（一九二
九）年九月生まれの八五歳です。北伊豫尋常
小学校初等科を昭和一七年三月に卒業し、そ
の四月に北豫中学校（北中、現在の松山北高



写真5 済美女学校の卒業式
（昭和22年3月 二宮弘子さん提供）

校）に入学し終戦の翌年、昭和
二十一年二月に繰り上げて卒業
しました。

北豫中学に入学した昭和
一七年は、すでに太平洋戦争
が始まっていて不穏な空気が
漂っていました。記念すべき
卒業式はなく、卒業を希望し
た者だけが学校の焼け跡で組
ごとに担任から卒業証書をも
らい卒業しました。その間、
昭和一九年四月から終戦まで
の一年五か月間、学徒動員で新居浜の化学工場に行つてい
ました。

司会 新居浜で体験した学徒動員について伺いたいのですが。
高石 私が北中三年の四月、学徒動員として四学級・約一八〇
名の生徒が先生に引率されて
新居浜の住友化学八洲第百二
工場（全国に展開された国策
軍需工場の一つ）に動員されま
した。すでに五、四年生は動
員され、そこで仕事に就いて
いました。作業は十数名の班
に分けられ三交代で行います。
私たちの班は劇薬を扱う硝酸
課で、私たちは一五名は乾燥係
でした。その時は硝酸が爆薬
になることも、劇薬であるこ
とも知りませんでした。厳し



写真7 新居浜の住友化学に動員された学徒隊
（昭和19年 『北伊予の伝承V』より）



写真6 卒業を控えた北豫中学同級生
（高石明男氏提供）

い環境の中、ただ一心に「お国のため」と黙々と作業に精を出しました。

私たち生徒は全員寮生活で二段ベッド、ぎゅうぎゅう詰めの大部屋です。食事は毎日三食とも「かんころ飯」で、パラパラと米がある程度でイモだけでした。それが明けても暮れても終戦まで毎日続きました。粗末な食事のため栄養失調になり、親元に送り返された友達もいました。そのままおれば生死に関わるからです。

三交代の作業以外は自由時間ですが、外は厳しい戦時下です。ほとんど寮内で過ごしました。時おり親が食料を差し入れに来てくれました。うれしかったですよ。私は母が何度か来てくれましたが、汽車の切符も配給でなかなか手に入らず大変だったと言っていました。当時、普段でも片道三時間くらいかかる新居浜までの汽車は、空襲や警戒警報のたびに停車し、いつ目的地に着くとも分からない。空襲の時は安全なトンネル内に逃げ込んだそうです。命がけでやっとの思いで辿り着き、何かと不自由でひもじい思いをしている息子にと、手作りの巻ずしや菓子、イモ飴などを差し入れてくれるのですが、寮生が群がり私の口にはあまり入りませんでした。

司会 玉音放送のことや空襲で焼け野原になった松山のことについてお聞かせください。

高石 軍需工場が集中する新居浜ですが、連合軍の捕虜収容所があったためか、小規模な空襲はありましたが、大規模な空襲はなかったのです。

玉音放送は工場内で集合させられて聞きましたが、誰一人戦争に負けたと分かっていた者はいませんでした。雑音がひどくよく聞き取れなかったのですが、改めて寮で先生から「日本は無条件降伏し負けた。」と聞かされました。その時の気持ち

は「神風が吹く国が負けるはずがない。ましてや無条件降伏したとは。」と、信じられず一瞬言葉を失い、大変な衝撃を受けました。

それから数日して汽車で全員松山に戻りました。焼け残った国鉄松山駅から市内を見渡すと焼け野原になっており、愕然として涙が流れ立ち尽くしました。家屋は焼け落ちて遮るものは何もなく立花橋がそこに見え、県庁や日本銀行の建物と石手川沿いの松並木が残っているだけでした。松山空襲の凄まじさを目のあたりにしたのです。

学び舎の北豫中学も焼けたため、昭和二一（一九四六）年三月卒業までの数か月は、市内で偶然にも焼けなかった松山商業学校で授業を受け、四年で繰上げ卒業しました。

（三） 満州でのことなど

司会 満州から引揚げた方、もう少し当時のことを膨らませていただいて、今回の座談会のメインであります終戦後のところについてお話を聞きたいと思えます。武市さん、満州での生活についてお話ください。

武市 父は軍人で階級は少佐でした。兄は香川県の善通寺で



写真8 国鉄松山駅前から見た焦土と化した松山市街（松山平和資料館をつくる市民の会「第12回平和展」より）

生まれましたが、私とすぐ下の弟は満州で生まれました。

満州の住居は軍の官舎です。父は職業の関係で転々と居所が変わりました。弟が生まれた新京(現在の長春)、鞍山、終戦を迎えた海城で生活しましたが、中国人との関わりはありませんでした。冬は凍った池でスケート遊びをした記憶がありません。軍の官舎は二重窓で床暖房のペチカ(暖炉の一種。石、レンガ、粘土などで造った壁面からの放射熱で暖房するもの)が



図1 満州(現在の中国東北部)の地図
(『まぼろしの国・満州』より)



写真9 軍人の父と長男を抱く母
(昭和12年 高石明男氏提供)

室内にあり、比較的恵まれた環境でしたが、冬は極端に寒いので綿入れを着て過ごしました。風呂から出て室外でタオルを何回か振ったら棒状になるほど厳しい寒さです。また夏は大陸内部特有の炎暑です。

司会 敗戦のことについてお話ください。

武市 敗戦については、子どもでしたから分かりません。官舎内での生活は以前と特に変わったことがなかったからです。引揚げのことは後で、お話ししたいと思います。

満州での私たち軍人の家族の生活は、まだ恵まれていたと思います。それにしても同じ満州でも開拓や警備、食糧増産に動員された満蒙開拓団の皆さんの苦労は計り知れないと思います。(注3)

三好 昭和一八(一九四三年)、自分が三歳で妹が赤子の時、父は「紫雲団」という名前の伊豫郡満蒙開拓団に入って満州に行きました。この開拓団を結成する際に、現地の学校で働く教員を募集しとったんですが、希望者がどうしてもおらんので、青年学校の教員であった父は、妻子は後で呼び寄せるということで単身で満州に渡ったそうです。

父は昭和二〇(一九四五)年一月に破傷風(土中の破傷風菌が、傷口から体内に入ることによって起こる急性伝染病)で亡くなりました。知らせが来て祖父と母は福岡から



写真10 村葬が行われた講堂
(『遺熱と追想』より)

釜山^{ふさん}經由で満州に行きました。現地で開拓団の人たちが火葬
にしてくれていたそうです。戦争末期の厳しい状況と厳しい
寒さの中で、よく行つたなと思います。

(四) 戦時中のくらし

仙波(司会者の一人)私は昭和一二(一九三七)年生まれの七八歳です。昭和一九年国民学校一年生のとき父の生家である徳丸に疎開^{そかい}してきました。私の父が当時御莊^{みしょう}(現在の愛南町)警察署長をしておりました。南予が米軍の関西方面の攻撃の侵入口であったため、本土防衛の指揮をとっておりました。家族にも危険が迫ったということで、父を残して父の故郷である徳丸に疎開してきました。戦後、父は公職追放になったため、私たち家族は大変苦勞しました。

深沼 当時いろんな物資がなくなりました。家は自転車屋をしていました。が、部品も材料も入ってこない状況で仕事はチューブ張りぐらいしかありません。ゴム糊のりがなくなりまして、代用品を作るため生ゴムを買ってきて、それをシンナーで溶かして代用品として使いました。その後これもできなくなつて父は兼業農家を目指しました。六畝む（六ルア）だけ田んぼを買いまして、あと続いて三反たん（三〇ルア）の小作をして食をつないだというのが実状です。

西影 軍事費用を調達するためか獎金附福券しょうきんつきふくけんが発行されてお
ります。第一回が昭和一九（一九四四）年九月、第二回が一

月です。今の宝くじの先駆けさきがけじゃないかと思いますが、発行元は株式会社日本勧業銀行（現在のみずほ銀行）です。

たが、実は父が三菱重工神戸造船所に勤めておりました。

あるとき神戸港の西の海岸を兄と歩いていたら、戦闘機が低空で飛んできた。帰つて母親に話をするのと石を投

げつけて落としたらいいという話です。そのころから毎日のように戦闘機が飛んで来た。幸い被害はなかったのですが、これは危ないということで母親の里である北伊豫に帰ってきました。父はその後シンガポールに基地を作れというようなことで行ったそうですが、昭和一九年の暮れに父が病氣になったので部下を残して一人で帰ってきました。田んぼを四反(四〇ア)ぐらい作って食べる物には苦労しなかったようです。

(五) 出征した戦地のことなど

松田 私の徴兵検査（徴兵適齡の成人男子に対し、兵役に服する資質の有無を判定するために身体・身上を検査すること）は、二〇歳と一九歳が一緒で繰上げの年でありました。



昼間は自分の洗濯やご飯の支度もせないかん。ご飯の量は少ないし、時おりコウリヤン（イネ科の一年生植物でトウモロコシに似た食用作物）も入っていてモサモサでも文句は言えない。昼間は道端の野草を引き抜いてお粥や雑炊に入れ、行軍中はご飯を食べていました。

終戦直前に桂林作戰に行くことでしたが、武漢から揚子江沿いを歩いて南京あたりにまで帰ったら敗戦を知りました。その後南京に何か月間か滞在し、水路の改修やドブ浚えなどの土木作業をしていました。

司会　日本が負けたと聞いたときどう思いましたか。

松田 何とも言えない気持ちでした。同じ部隊の仲間と一緒に暮らすしかないと思いました。戦友は兄弟以上ですから。その時は祖国に戻る気もない。中には隊から逃亡した者もいました。

司会 広島や長崎に原爆が投下されたことをどこで知りまし
たか。

松田 南京です。原爆が落ちたということ、日本が焼け野原になっているから帰国してもどうにもならないということを班長が言っていました。

八束 私は終戦の年（昭和二〇年）の四月、一七歳で入隊して終戦を迎え戦地へ赴いておりません。昭和一八（一九四三）年の三月に北伊豫国民学校を卒業して、その当時広島（なごや）の呉工廠

おふくろは、戦地へ行くんだったら刀を持たせてやらないかんということで、自分の帯を解いて刀袋ほとかたなぶくろを作ったというような状態でした。

司会 兵士の見送りについてお願いします。

田中 紀元二千六百年（昭和
一五年）の奉祝記念の人の多
さは凄いものでした。

その後召集命令が出まして、毎日のように出征兵士を神戸でお見送りしました。最初は大きい声で見送りましたが、終わりの方はお葬式そうしきのような、それは悲惨ひざんなものでした。言葉で表せないような感じです。



写真12

最後に北伊豫駅でお見送りのしたのは、終戦間近の昭和二〇（一九四五）年七月でした。

(六) 食べ物について

司会　食べる物はどうでしたか。

伊賀上 私が生まれて小さいころから、父は出征していたの



写真12 紀元二千六百年を祝う会
(昭和15年 北伊豫国民学校運動場
から農舎など北方面を望む)

で、母と妹と三人暮らして食べるものは、あまり不自由はなかった。小麦を粉にしてうどんを作ったり、お米も強制供出でわずかのお米(保有米)しか置けなかった。かぼちゃの雑炊を作って食べたりにして、ぎりぎりの生活をしてきました。農家であつても食べる物が十分だとはいえない時代でした。

篠崎 食べる物とか、お風呂に大変困りました。家族が大勢でしたので、田は八反(八〇坪)ほど作っておりましたが、時には川辺にセリを採りに行きまして食べた記憶があります。またイモ蔓の皮をとっててんぷらにしたりしました。すべてが切符制で配給でした。農家でも毎日の生活に苦労しました。本当にあのよな戦争は二度と起こしたくないですね。

司会 続いて、松山空襲や国鉄北伊豫駅の爆撃についてお聞きます。

伊賀上 私の青春時代は警戒警報と空襲の連続でした。空にB二九爆撃機

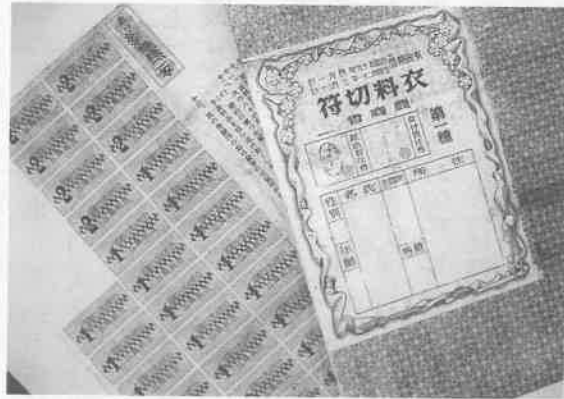


写真13 衣料切符
(『北伊予の伝承第11集』より)



写真14 飛行機から投下された焼夷弾
(松山市平和資料館をつくる市民の会「第11回平和展」より)

の編隊が通り、北の空には吉田浜への空爆の音と黒煙の上がる毎日でした。またある時には低空飛行の爆音がしたかと思つたら、家の屋根にバラバラと長さ七センチくらいの真鍮の物体が降ってきたことがあります。

松山の空襲(注4)は、七月二六日夕方の七時ころ、北の空が真っ赤に染まり、自分の家も危ないと思ひ宮下の山の方に着の身着のまままで走って行きました。松山方面を見ると一面が火の海で、火の明かりで敵機がはつきり見え、焼夷弾(高熱を発して燃える薬剤を装置した弾丸・爆弾)の落ちるさまは地獄絵を見るような、身の毛のよだつ出来事でした。

青年学校のとき、同級生五〇人と中川原地区権助の石寄場で大豆を植える作業をしていたときには、敵機の襲来に備え防空監視班を置いていました。私たち二人が任に当たつているとき、突如東の空に敵機が低空で直進してきました。引率の先生は「退避、退避」と大声で叫び、皆は麦畑や豆畑に逃げ込みました。監視をしていた私たち二人は逃げ遅れたので、土手側の小麦畑に飛び込むと同時に、後ろや横にバラバラと何かが飛んでくる音がしました。その時の恐ろしさは言いようのないほどでした。しかし犠牲者がなかったのが何よりでした。私たちは青年学校に在籍したとはいえ、毎日が勤労奉仕でした。松山が焼けてしばらくした後、奉仕活動で重信川の土手の草刈りと松根油(松根から採った松脂)採りに行ったとき、北の空に大きなキノコ雲が浮かんでいました。それが広島原子爆弾でした。後に広島島の惨状を知るたび、その恐ろしさで身が震える思いでした。その後も私たちは竹槍訓練やバケツリレーなど防火訓練の明け暮れでした。私たちの世代は、学校の授業よりも戦争と勤労奉仕のことだけが、いつでも心に残っています。

水口 松山空襲についてお話しします。昭和二〇年七月二六日

の夜、父が組内の集会から帰り「松山が空襲じゃ。」との大声で家の裏に出て見ると、国鉄松山駅西の方面が炎上中で、その後、炎は東の方面に移り松山一面が火の海となりました。

翌朝、勤務のため自転車で石手川の北土手を東に進むと、市内は一面の焼け野原、建物は県庁や日銀の鉄骨造りが目立つくらいで戦争の残忍さを痛感しました。

また東垣生に住んでいた伯父たち家族五人は、夜通し焼夷弾を避けながら重信川を渡り、早朝「命からがら来た。」とわが家にたどり着き、空襲の悲惨さを物語った思い出があります。

司会 国鉄北伊豫駅の爆撃についてお願いします。

水口 その日、私は風邪気味のため自宅で休んでいました。突然東の方から強力な爆音と共にバリバリバリという機銃の音に、これが戦争かと驚きました。北伊豫駅が狙われたのです。後で聞くと、北伊豫駅の西側に停車していた貨物列車が狙われたとのこと(注5)、また駅待合室の天井には当時の弾痕が今も残っています。

司会 以上で「戦時中のくらし」を終わります。引き続き「終戦後間もないころのくらし」に移ります。

(注1) 国民服令と衣料切符「北伊予の伝承Ⅳ」より

戦時色が一段と強まる中、昭和一五(一九四〇)年の「国民服令」により戦時下の男子の服装として、カーキ色(黄色と茶色の混じったような、くすんだ枯葉色。旧陸軍の服装に用いられたため国防色といわれた。)の国民服が正式に指定された。さらに、昭和一七年には標準婦人服の制定、翌年には繊維の節約のために「戦時衣料生活簡素化」が決定され、女子の制服は作務衣のようなへちま衿の上着ともんぺ姿が一般化した。国民服は冠婚葬祭にまで通用したのである。昭和一八年ごろになると国民服は平常化し、服装はカーキ色一色になった。

一方、昭和一七年には、衣料事情が極度に悪化し、全国的に衣料品の



写真15 男子のゲートル
(久万高原町 山村歴史館)



写真16 国民服と水筒
(久万高原町 山村歴史館)

「切符制」が実施された。衣料切符は点数制で、一人一年当たり都市部では一〇〇点、郡部では八〇点と決められた。人々は背広五〇点、国民服三二点、ワイシャツ一二点、もんぺ一〇点などの点数とお金と引き換えに衣料品や靴などの日用品を入手した。外出着は下着にいたるまで名前を書いた布を縫い付け、頭には戦闘帽、足元にはゲートルを巻き、男女とも水筒を携帯し、防空頭巾や非常用品携行の戦時態勢が義務付けられた。

(注2) 済川富代さんの手記「学徒動員」より抜粋

昭和一八年一〇月に男子大学生の学徒出陣があった。昭和一九年敗戦色の濃くなった九月、私たち松山高女学徒にも動員が来た。一年上の四年生が尼崎へ、三年生が今治へということになった。低学年の三年生はなるべく近いところにといい計らいで四年生より先に私たち三年生は今治へ行くことになった。



写真17 駅頭での女子学徒動員壮行会
(『まつやま市民の戦中・戦後』より)

今治市大新田倉敷紡績今治兵器工場であった。戦時中で国民学校や女学校のときも修学旅行に行けなかったで、私たちは予想もつかない今治行きに、修学旅行にでもいくような気持ちで支度、浴衣や帯まで荷物に入れた。九月八日今治に向けて出発、松山駅から今治まで一時間半くらいかかった。(中略)

女の子ばかり二〇畳に一六人の生活だから女同士難しい人間関係もあった。ただでさえ物資不自由な時節、食べる物、飲む物、着る物、日用品すべてに不自由しホームシックになることも多かった。白いユニホームに親が着物などで縫ってくれたモンペ、松山高女の校章入りの腕章、神風の鉢巻、戦闘帽が支給されたこともあった。靴もなくて草履、下駄。下駄も抽選だった。チリ紙も配給だった。石鹼も泡立つものでなく茶色の固い物が少し。

初めは一、二時間の授業も受けられたが、その後ヤスリの使い方などを教わり工場へ。現場は二、三ミリの機銃弾造りである。(中略)立ち仕事ばかり。油にまみれた手は冷たく、温めるものもない。機械の上にはぶら下がった裸電球に手をかざすのみ。(中略)食事は食堂で三食貰ったが、長い列を作って井の蓋の上のつたご飯(干し芋の入ったもの)と一皿のお菜を貰った。ほとんど野菜で肉も魚もなかった。さつま芋の茎の煮たもの等。食事時には白湯があったと思うが、工場内にも寮にもお茶等一切なかった。(中略)

春になって私たちは四年生になった。一年下の城北高女(現在の松山北高校)や大洲高女(現在の大洲高校)からも動員で来られた。私たちが指導する側になって一緒に旋盤に向かった。城北の子とも仲良しになった。そのころから工場も六時から一四時、一四時から二二時までの二交代制になった。(後略)

(注3) 池内清内氏の「満州開拓義勇軍に参加して」「北伊予の伝承V」による

私が一六歳のとき、今でいう中学二年生(当時高等科二年生)のころは戦争も末期の状態でありました。

当時の日本は食糧難であり、何を買うにも切符制でした。主食はさつま芋の乾燥したものに米を少し混ぜた「芋めし」の毎日でした。

そこで受け持ちの先生が「現在日本は非常に食糧に困っている。国のため食糧増産の戦士として、満州開拓青少年義勇軍に行かないか。」と言われ、私は志願しました。昭和一八年二月一七日でした。

高等科二年在学中、卒業を前に全校生徒に「万歳、万歳」と見送られ、北伊予駅を出発、県庁前に百八十名の者が集まり「愛媛中隊」を編成しました。

それから茨城県の内原訓練所で五十日間訓練を受け、新潟港から朝鮮の羅津港に着き、列車で満州の牡丹江の訓練所に着いたのが一八年の五月初めです。

作業は満州の開拓であり、大平原を相手に土起しなどの農作業が主でした。毎日毎日赤い夕陽に照らされての重労働です。冬は零下四十度の寒さの中、軍事教練や伐採作業などが続きました。

昭和二〇年に入ると実戦同様の教練になり農作業は一切ありませんでした。六月に入りソ連が参戦し、満州の関東軍(関東州および旧満州に駐留した日本の大陸政策の先兵となった旧日本陸軍の部隊)の主力は南方に行っていて、満州は我々開拓義勇軍の先輩たちが抵抗しました。けれども全滅でした。あの満州での辛苦は言いようがありません。もう戦争はこりごりです。

(池内さんは、昭和二年一〇月、コロ(葫蘆)島を出港、博多経由で無事帰国しました。)



写真18 開墾作業に取り組む移民団員と住居(松山市平和資料館をつくる市民の会「第12回平和展」より)

(注4) 済川富代さんの手記「松山空襲」より抜粋

昭和二〇(一九四五)年七月二六日午後九時過ぎ、私は脚気のため学徒動員で派遣されていた今治工場から休暇を貰って松山に帰っていた。

私は疲れて早く床に入っていた。突然空襲警報のサイレンが鳴り渡る。

「富代さん早く起きんと空襲じゃ。」と母は急いで一斗缶に入れたお米、食料品を裏の防空壕に運ぶ。私は毎日今治で山までの退避に疲れ、松山なんか工場もないのに焼かれるはずがないと蒲団をかぶった途端、物凄い炸裂音、これはただ事ではないと跳ね起きて頭巾とモンペ、バケツを下げる。

古町から平和通りにかけて次々と火柱が上がる。あまりにも近いのでバケツに水を汲んで消火体制に入る。暗闇の中から「早う逃げんと逃げ道が無くなる

ぞう。」と言う

男の人の声に

我にかえる。

その途端無言

で母は走り出

す。私も後か

ら走る。四つ

角から西へ、

阿沼美神社へ、



写真19 空襲で焼失した松山市街地(白い部分)
中央が松山城と濠、右は国鉄松山駅、左斜めは石手川
(松山市平和資料館をつくる市民の会「第11回平和展」より)

爆弾が落ちて火柱が上がった。一〇秒ほど遅かったら通り道がなくなるころだった。母は無言のままひたすら走る。味噌小学校の西の方だったと思う。七月初めに植えられた水田の中、ちょうど蓮根田があつて蓮の葉の陰に潜り込む。水田に落ちる焼夷弾、シウルシウルと焰が燃える。蓮の葉陰で念仏を唱える声も。街は真っ赤に燃え盛る、空も真っ赤、時間の経過は分からない。(中略)

後から聞いた話、戦災のあつた翌朝、松山から戦災者が重信川に架かる中川原橋を北伊豫へ南伊豫へと親類を頼って歩く人の姿が絶えなかつたそうだ。(後略)

(注5) 三好正氏の「敵飛行機北伊豫駅爆撃」散華と追想」より抜粋

北伊豫駅が攻撃目標になったのはなぜだろう。七月二六日松山市が空襲されたため、水道が止まり松山駅では列車に給水が不可能になったので、北伊豫駅で給水するため(北伊豫駅西の泉・新泉より消防ポンプにより給水した)多くの列車が停車するようになり、松山空襲の翌々朝の七月二八日、これを目標に爆撃したのであった。

しかし、幸いにも列車、駅舎ともに無事で、その付近に多数の砲弾が投下されたのである。その一発は駅の西の加藤平氏の牛小屋を直撃し飼牛は犠牲となって爆死した。もう一発は農協の一号倉庫の南西の隅をえぐり、線路西の畑の中に投下された。あとの一発は駅の西のポンプ小屋に命中し、これを木端微塵に粉砕した。このとき杵形のコンクリート製の水溜りに避難していた駅員が奇跡的に助かったという話も聞いた。

最も被害が大きかったのは、駅から三百メートルほどの距離にある加藤英壽氏の家である。家に直撃弾を受け、屋根は撃ち抜かれ、戸・障子は三メートルから五メートル吹き飛ばされ、瓦や木材など散乱し、足を踏み入れる空地さえないほど破壊されたのである。(中略)

北伊豫駅爆撃は、一日に四回も行われたが、その間友軍機は一機も飛び立たず、敵機の思うままに爆撃を許したことは如何にも残念なことであつた。友軍が戦力を使い果たして、吉田航空隊には一機も飛び立てるものがなかつたのである。(後略)

二 終戦後間もないころのくらし

終戦後間もないころとは、昭和二〇（一九四五）年八月五日の敗戦の詔書から二五（一九五〇）年まで約五年間を指します。

敗戦の虚脱状態の中、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）による一連の民主化政策が実施され、価値観が大きく転換しました。

人びとは、極度のインフレと食糧難に苦しみながらも配給と代用品などで物資不足を補い、不自由なくらしの中でも、明日への希望を抱き、励まし合い、死にもの狂いで必死に生きた時代です。

それでは、これから「終戦後間もないころのくらし」についてお聞きしたいと思います。

（一）玉音放送を聞いての心境について

司会 最初に、皆さんは昭和二〇年八月一日の戦争終結の天皇の「玉音放送」（注6）を何歳の時どこで聞かれ、その敗戦というショックな事態をどう受け止めましたか。その時の心境を一言ずつお願いします。

八束 終戦の玉音放送は、軍隊と申しますか所属部隊の移動中に聞きました。とぎれとぎれの玉音放送を聞いた覚えがございます。これで今までのような苦労が終わったなと思う一方、連合軍が進駐してきてどんなになるかなあという心配もありました。

松田 私はこの折には南京にいましたが、原爆が落ちたなら、もう日本は全滅し誰も生きていないだろうということで、この中隊の行きつく所に住もうじゃないかと考えたものでし

た。日本に帰り広島に降り立ち原爆の落ちたところを初めて見ましたが、中国で聞いた時には、日本はもうゼロじゃと思いました。

伊賀上 終戦のあの時は、家のラジオで聞きました。そしてその前に、あのビラ（米軍機による終戦の告示）が落ちたでしょう。すごい、飛行機からビラがバラバラバラと落ちてきた。そこで近所の人四、五人が道路の端で「これで戦争も終わったんじゃないか」と言っていました。

また近所の男の子が、「わしらはこれから予科練（海軍飛行予科練習生）に行くようになってるんじゃない。なんで、なんでこんなになったのじゃ。」と話していました。それから間もなくして終戦の放送を聞きました。

武市 満州にいましたので、玉音放送は聞いてないんですけど、戦争が終わったというのは何となく周辺の雰囲気で、感じたような、感じないようなで、あまりショックはなかったように思います。

神野 当日、八月一日は、友達と例のごとく北伊豫駅の西にあります徳利泉（とくりいずみ）じゃったと思います。その泉で泳いでいた時に、大切なラジオ放送があるから帰ってこいと呼ばれ、自宅に帰りラジオを聞いたのですが、雑音が多くてなかなか聞き取りにくい上に、内容を聞いても国民学校六年生では、ちよつとこの中身は理解しえない。今日もコピーを持っているのですが、今読んでもなかなか理解できないぐらいな終戦の詔書

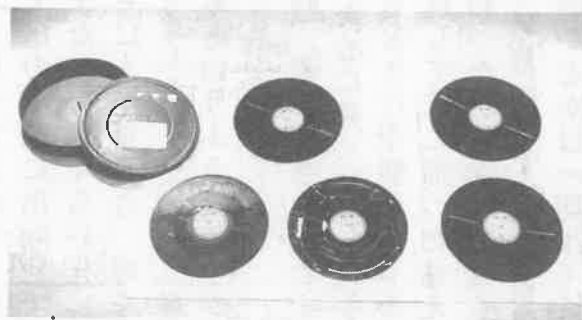


写真20 昭和天皇がラジオで終戦の詔書を読み上げた玉音放送の原盤（原盤の2枚組と3枚組、それが入っていた缶）

でございます。で、おふくろが、「とにかく戦争に負けて戦争は終わった。」と言うのが結論でございます。その話を聞いて私自身が一番ショックでした。自分の将来は海軍の軍人になるのが夢でございましたので、ああ、自分のこれから進む道が閉ざされたんだなあと思います、お先真つ暗だと感じました。

田中 終戦の天皇陛下のお言葉は、自宅で姉婿あねむこと一緒にラジオで聞きました。怖さや負けたという気持ちよりも、ああこれで空襲がなくなつて静かになるという印象でした。

ちよつと原爆の話をしたのですがよろしいですか。原爆の話は、いろいろとお聞き及びのことと存じますが。私の聞いた話をちよつと聞いてください。

私の先輩で三菱重工広島造船所の総務部長を務めておられた人に聞いた話です。ちよつと、原爆の投下された当日、総務部の部下一六名を広島駅の国鉄の駅へ勤務奉仕に通常どおり行かせたそうです。ところが、とんでもない爆弾が落ちたというので、すぐ帰るよう使いを出し全員呼び戻しました。一六人とも元気で何もなく普通のとおりに帰つてきて、「良かった、良かった。」ということでした。ところが翌日二人会社に来ないのでどうしたのじやろうと家に行くと、もう、とんでもない体調になりその晩亡くなった。その次の日二人が会社に来ないので、おかしいと思つたら、同じように亡くなった。その繰り返しで、二週間ぐらゐの間に一六人とも、無残な死に方をされた。これは言葉では言い表せないことでした。最初の二人が亡くなった時に、後の一四人についてはそれぞれ気をつけるよう、すぐに病院に行くよう話をしていた。病院では異常がないと言われたそうです。しかし、非情にも二週間ぐらゐの間に一人欠け、二人欠け、一六人全員亡くなった。原爆が落ちた時は、会社に帰ってきて、全員元気で普通の顔だった。早く帰つてもいいよと言つたが定時まで勤めて、じゃ

さよならと元気で帰つて行つた。翌日からの悲惨な状況は語り尽くせません、原爆の恐ろしさを強く感じております。

水口 玉音放送につきました。は、当時、私は一九歳で農事試験場に勤務しておりました。当日は土曜日だったと思います。昼の汽車で松山から北伊豫に帰り、駅に降りると玉音放送があるらしいと聞き、「玉音放送とて、天皇陛下が今頃何を言うのだらう。もつと頑張れ、と言うのかな。」くらいに思いながら家に帰りました。放送はその間だったので私は実は聞いてなかったのですが、後であれは終戦の話だったと、聞かされて、まさかそんなこと、と思つたのが実態でございます。

私も当時、重砲兵を志願して内定しておつたんですが、召集がなかったもんで行けなかったことで、戦争は厳しい状況と感じていました。しかしまさか戦争がなくなるなんて、信じられず、話にならん嘘うそみたいだ、と思つたのが実態でございました。

篠崎 ちよつと一五日の日はやぶ入りでしたので、母に連れられて妹を乗せた乳母車を押して母の実家に向かひていましたら、五人ほど固まつており、また一〇人くらい先に数名がかりこまつており、あつちこつちに人が集まり、噂うわさをしていました。そこで終戦を初めて知りました。この時、「戦争ぐらゐ怖いものはない。どうして、ああいうふうな戦争が起つたもんじやろか。」と、私、物苦しさがありました。

渡部 私は、国民学校一年生の時、家で聞きました。父親が戦争に負けたと言つたんだだけしか心に残っていないんです。当時は一年生で、学校に行きよるときに空襲があつたら帰れと言われ、何回も途中から引き返して家に帰つた覚えがあつたので、ああ、これで戦争が終わつたから途中で帰らんでよくなつたなあと思つたことが残つております。放送を聞いて、負けたとか戦争の被害がどうなのかとかは一切出てこなかつ

たと思います。

三好 大変申し訳ありませんが、全然覚えてないし、私も国民学校一年で渡部君と同じやったんですが、家庭内に男親や男子がおらなくて、おふくろだけやったから、そのような会話もなく全く覚えてないんです。

西影 新居浜の職場で先輩から通訳付きで聞かされました。びつくりしました。大ショックでした。もう、なんか、「人生を変えないかん。ここにおっつてはいかん。」と思い、早速その月に会社を辞めて北伊豫に帰ってまいりました。

丸山 ちょうど、夏休みじゃったので、兄や姉と一緒にラジオを聞きました。ラジオの音が悪いのと、言葉が全然分からないので、ちよつと買物に行つてと言われて出掛けた帰りに、近所の先輩でニュースとか世論に詳しい人に出会い、あんな戦争終わつたんで、と聞かされました。ほう、と言うたばかりで、悲しんでいいのか喜んでいいのか分からないまま家に帰りました。

深沼 私も国民学校一年生で、その時の気持ちというのとはほとんど記憶にないんです。怖いとか、悲しいとかはありませんが、情景だけ覚えております。大人たちは家の中で聞いたようですが、私は、縁側にいて聞いていません。中の大人たちは泣いたり寂しそうな表情でした。

升田 私が、玉音放送を聞いたのは松農(愛媛県立松山農業学校獣医畜産科)二年生(一六歳)の時でした。校長官舎裏側の運動場に続く広場に土下座をして、天皇陛下の放送を聞きました。大変ショックを受け、獣医の見込みがないということで、松農を卒業後、教員を目指して愛媛青年師範学校に入学しました。

司会 戦時中、外地に送られたお二人は、終戦後内地に帰られるまでのことをお話してください。

松田 日本に帰還したのが終戦の翌年の二十一年(一九四六)年四月でした。上海からすし詰めの貨物船で博多港に着きました。そこで、上司から二〇〇円(同年の米一俵二六〇キログラムの値段は二二〇円)をもらいました。お金をもらったのは入隊して初めてのことでした。

博多から列車で広島に降りると街が焼け野原になっており、宇品港までまっすぐ歩け

ました。宇品港から今治へ、今治から国鉄で北伊豫駅に着いて、我が家へ帰る途中、小学校の同級生に会って、「少し帰還が遅かったのう。」と声をかけられた。自宅に着くと、兄(長男)の遺影が飾ってありました。また次兄が負傷兵として帰ってきました。三番目の私が家業である農業を継がないかと覚悟しとりました。父親は息子三人も戦争に取られたため本当に苦労したと漏らしていました。

武市 神崎に引揚げてきたのは、終戦一年後の昭和二十一年(一九四六)八月でした。終戦後、居住地域で引揚命令が出るまで留まっていた。官舎はロシア兵と八路軍(日中戦争時、華北方面で活動した紅軍(中国共産党)の軍隊)の監視下にありましたが、危害を加えるようなことはありませんでした。

敗戦の武装解除後、捕虜収容所から脱走した六人の日本人を母は官舎に一晚泊めたそうです。そのことは平成元年に出版された紙本徳之助氏(現大洲市青島出身)の手記『逃亡記』に、決死の逃亡一年半の記録として綴られています。

年	米の値段
二十一年	金一十円八十銭
二十二年	金一十円九十銭
二十三年	金一十二円四十銭
二十四年	金一十三円五十銭
二十五年	金一十六円五十銭
二十六年	金一十六円九十銭
二十七年	金一十八円八十銭
二十八年	金一十八円八十銭
二十九年	金一十八円八十銭
三十年	金一十八円八十銭
三十一年	金一十八円八十銭
三十二年	金一十八円八十銭
三十三年	金一十八円八十銭
三十四年	金一十八円八十銭
三十五年	金一十八円八十銭
三十六年	金一十八円八十銭
三十七年	金一十八円八十銭
三十八年	金一十八円八十銭
三十九年	金一十八円八十銭
四十年	金一十八円八十銭

写真21 米の値段表

引揚命令が出てから行動を開始し、最後に住んでいた海城から陸路すし詰め状態の無蓋列車でコロ(葫蘆)島(港)に集められました。ただ、凄く水が飲みたかったことを今も鮮明に覚えています。中国のコロ島から日本の舞鶴へ引揚船で何日かかったか(注7)は、よく覚えていません。母は四人の子どもを連れてかえったのです。生まれたばかりの赤ちゃんがいたので必需品のオムツだけを持って帰ったと思います。引揚船が舞鶴に着いた日に、満一歳の誕生日に妹が亡くなりました。母の栄養失調が原因でした。舞鶴に上陸したあと火葬し、神崎の墓地に埋葬できたことは不幸中の幸いでした。多くは水葬といって船上から海へ投げ入れられていました。

上陸後、母が栄養失調で舞鶴の病院に入院することになり、私たち子ども三人(兄九歳、私七歳、弟三歳)は引揚者専用の森寮(注8)に収容され、一か月くらい生活したでしょう。母恋しさのあまり、母の入院している病院へ行こうとして道に迷ってしまいました。舞鶴の町で親切に声をかけてくださった病院まで連れて行ってくれた若い女の人がいきました。その方のお母さん(吉岡ゆきさん)と母は、吉岡さんが亡くなるまで文通を続けていました。

その後、父の長兄が迎えに来てくれ、父の故郷である神崎に落ち着き、兄と私は二学期から北伊豫国民学校に転入しました。父は軍人でしたのでシベリアに抑留され、昭和二三



写真22 コロ島から引揚船で着いた舞鶴港
(舞鶴のホームページより)



写真23 松山市駅前のヤミ市
(『まつやま市民の戦中・戦後』より)



写真24 昭和25年ごろの松山市駅前
(『まつやま市民の戦中・戦後』より)

(一九四八)年六月頃帰還ができませんでした。父の帰るまでの二年間は、母にとって一番苦しい時期だったと思います。子どもを育てるため初めての慣れぬ農作業をし、日銭をかせぐため土木作業や給食の調理員もしていました、口には言い表せないほど大変だったでしょう。親子四人六畳一間の生活、風呂は貰い風呂、ノミや蚊に悩まされました。

(二) 食生活と衣生活について

司会 次に終戦後、一層悪化した食生活と物不足についてお聞きしたいと思います。ちょうど、物価統制令下における食糧、衣料など生活用品の調達・確保についてお願いしたいと思います。切符制、あるいは配給制、外食券など、また、ヤミ市、ヤミ米(正規の取引に寄らない市場、米)、物々交換、買い出しなどのタケノコ生活(竹の子の皮をはぐように衣類などを一

品ずつ売って生活費に充てる苦しい暮らし。ここでは着物などを売って食糧と物々交換して生活することの時代だったと思います。これにつきましては、当時、直接台所を預かって苦勞された女性の皆さんにお伺いしたいと思います。(注9)

伊賀上 物々交換は、長浜方面から売りにくるかつぎ屋さんとお米とお魚類、竹輪など海産物を交換していました。衣類

については、母はお裁縫ができるし私もボツボツ服など縫っていましたので、仕立て直しして着ていましたからほとんど買ったものはなかったです。毛糸だけは手編みがしたいので、切符制の時



写真25 かつぎ屋さん
(予讃線 昭和28年ごろ
『まつやま市民の戦中・戦後』より)

は買ったり、物々交換で手に入れたりしていました。ですので、ほとんど衣類も、食べるものも、自分でおうどんなども打ったりしていましたので買うものはない生活でした。

司会 女性の方で女性と子どもの服装について何かありませんか。また、いろんな衣料の再利用ですが、昔の着物を洋服に仕立て直したり、もんぺを縫ったりなど、お話しただければと思います。

武市 私たちは、着の身着のままの引揚者でしたので物々交換するにも交換するものがなかったため、母は何もできなかったと思います。子どもたちを育てるために三反(三〇呎)ぐらいの田んぼを借りて農業をしていました。稲を刈った後に、タニシがたくさんいました。今の真つ赤な卵を産むのではな

く在来タニシを捕ったり、竹筒に袋を付けた網でイナゴを捕って、どんな食べ方をしてたか覚えていませんが、栄養のタンパク源としてそんなものまで食べざるを得なかったのです。ヤミ米は対象になるものがなかったものですから、全く経験がありません。とにかく、一日一日食べることで精いっぱい生活でした。

篠崎 戦時中にはお米を作っても、一人当たり何キロと決められて、後は供出させられていたんです。ある時、どぶろく(濁酒)を造っていたら、方々警察が調べに来て、便所に置いていたのが見つかって押収されたので、早く便所に捨てなさいと近所の人が進言してくださったことがありました。また、当時はお砂糖の一袋もなかった。今思うとかわいそうに思います。甘いものが食べたくてズルチンや



写真26 米の供出風景
(『まつやま市民の戦中・戦後』より)

サツカリンを使ってパンを作ったりしましたが、分量を間違えると苦くて、あれは毒に近いもんじやないかと思いました。それくらい食べ物に不自由しました。そして衣類、衣料品などは母の支度が良かったもので、それを壊して裾裏の八掛(着物の裾裏につける布を外してもらい、私もまだ子どもでしたが、近所の方が「教えてあげるからキレ(布)を持っといで。」と言ってくれたので、裁断をしてもらって自分で手縫いで縫い上げて親戚や方々へ着ていった記憶があります。

丸山 私の場合は、あまり記憶がないのですけど、母親は大変苦勞したんだろうと思います。私には姉もおりましたし、叔父とか叔母がおりましたし、母の姉妹も近くにおりましたので、その人たちと一緒に譲り合い、仕立て直しをしたり、下駄を作って鼻緒を縫ったり、また近所の人といろいろなものを作ったり、お互い教えたり教えられたりしていました。私は姉がいたので、「いつも、お古ばかり着せられていやじゃ。」とよく言っていたのを覚えています。仕立て直しは今でもしたいのですが、そういう時代でもないので捨てようかと思いますが惜しいですねえ。ヤミ米のことでは、警察に追われて、「かくまってくれ。」と誰かが家に飛び込んできたりしたことがあります。

司会 カーキ色の国民服や払い下げの軍需品とか外套、普段着にはドテラなどを着ていたと思うんですが、男性の方に当時の服装についてお聞きします。

八束 衣料につきまして

は、私が終戦後の最初に着たのがホームスパン（再生した太い糸でつむいだ布）のオーバーだったと思います。そのほかにはあまり、記憶がないんです。襦袢などは、肥料袋などを洗って仕立てて着ていました。小学校のテントなども、それでやりよったと思います。



写真27 カーキ色の国民服と戦闘帽とへちま^{えり}襟の標準服（『北伊予の伝承Ⅶ』より）

農業をやっていました、当時の食事はイモ粥^{がゆ}でお米がちょっと入り入ったお粥で過ごしておりました。

司会 特に何か話しておきたいということがありましたら、どなたかお願いします。

水口 物資不足についてですが、私は当時、郡中（現伊予市）の食糧事務所におったんですが、衣料品の配給がありまして、生地をもらって大喜びして、早速、背広に仕立ててよく着ました。そして、結婚してから、女房が服の整理をしていたとき、「お父さん、これ、背広でてなんぞな。ドンゴロス（米、麦を入れる茶色の布袋）みたいなシナマイ袋で作つとるがね。」と言いました。そういう生地の配給でも、大変うれしかった。長着たのです。戦後の物資不足はそんなもんでした。

升田 農家であつたから子どもの頃は麦飯^{むぎい}でしたが、米飯になつてからはそれほど苦勞をしたことはなかったと思います。

司会 ほかにございますか。

田中 私は、特に不自由だったという記憶は全くなかったです。ただ、さつき司会者が言われましたが、あのドテラはよく着せられました。あれは非常にいいものですね。今でも冬は暖かくていいもんです。それと防空頭巾^{ぼうくうずしん}（戦中の頭部を保護するための綿入れの頭巾）は、当然戦争中は必需品でしたが、戦争が終わってもよく被^かりました、あれは温かくて防寒具として大いに役立ちました。

それと、食べ物のお話ですが、先ほどイナゴの話がありましたが、イナゴの食べ方は、取って竹筒に入れて帰ってそのまま熱湯で湯がいて乾燥させて、これを煮つけてつくだ煮のようになりますと非常においしく日常のタンパク源としてよく食べました。

それと、すごいことがありました。おいさんの家に牛が二頭おつた。ある日、学校から帰ると、「おまえ、ちよつと行って、

おいさんとこの庭を見てみい。」と言われた。行ってみると人が大勢集まっていた。何をしておるんだろとのぞいて見ると、牛を殺して、さばき「皆で肉を好きなだけ持つて帰れ。」と、こんなこともあった。家で飼っていた牛、豚を自分とこでさばいていた。それから、鶏、ウサギはよく食べました。食べることに不自由をした記憶はありません。

三好 近所に疎開児童やひとり親の子もたくさんおったので、父が亡くなつてからもさびしさを感じることはなかった。疎開してきた人にイナゴやオオバコを食べることを教えてもらった。タニシはよう食べた。ツンバナやスイジ、野イバラの芯も食べた。農家なんで、家で作つたものだけでも食べ物はあるし、皆な同じように貧しかったので、貧しいことを恥ずかしいとか、人をうらやましいと思つたことはありませんでした。このことで、頑張りや連帯感が養われ、生きる力が強くなつたと思います。今思うと、引揚げてきたり、疎開してきた人たちはもつと苦しかったらうと思います。

(三) 終戦直後の住宅事情について

司会 続きまして、戦後の住宅事情についてお聞きしたいと思います。特に、疎開されて定住された方、あるいは復員されたり、引揚げて帰つてこられた方にお聞きしたいと思います。

田中 昭和一九年の秋に家を建てることになりました。父親がいなかったのに、どのようにお金を工面したか知りませんが。建築確認を申請すると、新しい木材は使用できない規制がありました。そこで、ある古民家を買つてこれを解体して、表面の見える所だけは古い木を使い、上の方とか裏の柱とかには新を使いしました。その材料は北条の叔父さんの山から切

り出して使つたようです。一九年に出来ていたので住宅に気を遣うことはなかった。ただ、生活する上で、焚き物(たきぎ)がなく、麦藁で風呂を沸かしました。パツと燃えてすぐ終わる。藁は麦藁よりはちよつとは持ちがいが、焚き口に付いたらんといかん。特に母親が、ご飯を炊くのに大変不自由をしていたという記憶があります。

司会 神野さん疎開されて帰つてこられてからの住宅事情についてお願いします。

神野 疎開して帰つた当時は、伯父の家に居候しておりました。戦争が終わりまして、父親が復員して帰ってくることにになり、いつまでも伯父の所に居候しているというわけにいきません。そこでまた伯父の世話で土地を分けていただいて、父親と子ども、基礎工事は自分でできるところは父親と二人で石などを運んだりした記憶がございます。こうして、伯父のお世話があつて新しい家ができたと心から感謝しております。

(四) 戦後の農家のくらしについて

司会 続きまして、戦後の農家のくらしについてお聞きしたいと思います。米や麦の強制供出、保有米のこと、それから当時、農作業で子どもが重要な労働力であつたことなどです。また、



写真28 かまどの焚き口と火吹き竹
(久万高原町 ふるさと旅行村)



写真29 自家製のムシロや俵を編む
(久万高原町 山村歴史館)



写真30 伊予がすりの手織り機
(久万高原町 山村歴史館)

農家のくらしの中での副業について、俵やムシロ、縄などの手内職、それから伊予がすり(注10)の賃織が行われていたと思います。そのようなことについて、お聞きしたいと思います。また、農家にとっては重大な農地改革についてもお願いします。

水口 農家では当時から縄ないをしよったんです。縄ない機械じゃなくて、手で藁をかまして縄をなっております。その頃は、農家ではどの家でもやっております。私もやりました。また、女の人は、伊予がすりを織る機を借りてドン織っていました。

そして「強権発動」ということがしきりに出ありますが、私は当時食糧検査所におりましたが、県の出先、伊豫地方事務所の経済課長ほか二人と経済連の方一人、食糧事務所からは私が行くことになり、五人が検査指定に指名されて中山から広田を順に回り、供出を予定どおりしてない人に、「足らんですよ、出してください。」と言う。「ないんです。」と言うたら

否応なしに納屋や蔵を探す。現物があつたら、たとえ一斗(一五キログラム)の米でも、報酬米(供出免除米)でも、「これあるじゃないか。」と供出させていた。そのような経験をしました、それぐらい米の管理については厳しかったのです。

司会 この農家のことについて、何かほかにありましたらお願いします。

渡部 私の家は農家でございました、そこで、私が育った状況を分かる範囲でお話させていただきます。当時の農家は大家族で自給自足が中心じゃなかったろうかなあ。どの家でも、当時は他所から帰られた人がいたり、産めや増やせの政策があつたので子どもがたくさんいました。子どもをたくさん産むと国から表彰されるという話も聞いたことがありました。私も兄弟が六人いるのでございます。

農家は自分の家で、米、麦、粟、トウモロコシ、サトウキビなんかを自作して、それを使って味噌、醤油から砂糖まで自家生産していました。それから、終戦直後には私の家が農家でしたから、松山からどこかの奥さんだろうと思われる方が着物や帯を持って来られて、お米や麦と交換してあげていました。その折、遠くから来られたんじやからとサトイモをあげたら大変喜ばれ、「帰るのに茎が邪魔になるから切って捨てておきましょうわい。」と言ったら、「その茎も頂けますか。」と言われ、聞くと「食べます。」と言って大事そうに持ってかえられたのを覚えております。

それから、イナゴ、ウナギ、ドジョウ、カニなどを獲るのが子どもの頃の遊びでもあり仕事でもありました。また、家庭での子どもの手伝いは、一人前の働き手のように使われました。ですから、朝、学校へ行くまでに牛の世話や鶏の世話をし、帰ったらまた牛や鶏の世話をするのが、子どもの仕事でした。そのほか、田んぼに行くと、当時は今のような機械じゃ

ございませぬ。牛を引っ張って、田んぼを鋤いたり耕したりする時の牛の世話をしたり、父親が買ってきた薪を割っていた覚えがございます。子ども一人一人がそれぞれの役割を持っておりました。風呂に関していえば、五右衛門風呂(かまどの上に丸型の鉄の桶を据え付けた風呂)でしたので、姉が井戸からバケツで水を汲んで風呂に運び沸かしておりました。焚き物は、麦藁(わらわら)でございました。このような農家の生活をした一人でございます。そんなことが頭に残っています。

西影 私、三反(三〇ア)余りの兼業農家をやっております。当時、農業が本職じゃないもんですから俵を締めるのに苦労しました。当時の麦はまだ俵であつたと思うんですけど、その後、米から袋に変わりました。やれやれ、うれしかったです。まあ、三反余りの兼業でしたけれど、やっぱり一、二俵はヤミ米で売っていて、自分の給料より高額じゃった記憶があります。

升田 田んぼが四反ほどあつたんですが、なんとか自分でやらないかと機械を買ったんですが、家族だけではやれず、他人に来てもらって、稲こぎ等してもらっていた覚えがあります。

農家にとって大事なことは、農地改革(注11)ですな。地主は困ったでしょうが、小作人は大喜びでした。

松田 私が兵隊の折に考えていたことと帰ってから考えたこととは、大分違いました。兵隊に行つた時は、「これほど難儀をしておるのじゃけん、農業は一人で十分やれる」という意気込みがありました。その後機械化時代になつて、人より早く機械化を進めて皆に早く追いつかにならんと、そのためには一生懸命働かないかと思つたことが、今頭に残っております。

(五) 戦後の新教育制度について

司会 引き続きまして、教育制度についてお伺いしたいのですが、軍事教育時代の国民学校から、GHQによる六・三制に変わりました。この新制度の小・中学校、それから男女共学のこと、学校給食などについてお話していただけますか。

神野 学校教育も制度の変革が大変激しかったです。旧制中学二年の時、昭和二二(一九四七)年に六・三制が実施されました。新制中学が誕生するとともに、旧制中学はそのまま後輩は入つてこないため、卒業するまで最下級生になつておりました。その後、またいろいろと教育制度が変わりまして、学校名も松山第一高等学校であるとか、なんとか併設中学であるとか、知らぬ間に変わりましたけれど、昭和二五年、高校の再編成と、それから地域性によりまして、松山東高校、松山南高校、松山北高校の三つができて、国鉄の下り線はともかく南高校に行けというところで南高校に強制的に通うことになりました。そこで初めて男女共学という形になりました。それまでほとんど女性とものを言う機会もなかったため、学校を卒業するまで二年間の間に、一回ぐらいしか、女性とものを言ったことはなかったと記憶しているんですが。我々の時代は、男女七歳にして席を同じゅうせず、ということでございます。まして、なかなか雰囲氣的にも慣れない時代で、戦後の教育制度の大きな変革の渦中(かまど)にあつた旧制中学校、高校時代だったと、自分では考えています。

八束 終戦後に復員してきまして、青年学校がまだございました。その青年学校を修了した年に新制高校ができたように思います。その後、高校の再編成で松山南高校と松山工業高校、伊予農業高校の三校が統合して松山南高校となりました。私は、伊予農業の定時制へ通っていたのですが、結局、卒業

は松山南高校でした。

司会 小学校時代の給食などのお話をしていただけですか。

深沼 給食の記憶はですね、小学校四年だったと思うんですが、ララ物資(公認アジア救済機関。昭和二一(一九四六)年アメリカの宗教・労働団体により組織されたアジアの生活困窮者の救済を目的としている)の脱脂粉乳の給食が始まったんです。今の給食と違って栄養補給だけということですけども。始まった時、「皆な、なんか入れるものを持ってきなさい。」と言われ、それぞれ持つてくるんですけれど、その当時はみんな入れる器がないものですから、いろんなものを持ってきました。私も茶碗をですね、一つ何とかもらって、その茶碗で給食のミルクを飲んだ覚えがあります。当時は脱脂粉乳ですから非常に臭くてまずいと言って、よう飲まない連中がおりました。でも私にはごちそうでした。飲めない人の分は頂いて飲みました。おまけに言えばその茶碗を割ったんです、親に代わりをくれと言えなくて、なんとその茶碗を飯粒でくっつけたら、くっついたんです。飯粒でくっつけた茶碗をしばらく使いました、その翌年にはコップを買ってもらったんですけど。一つ一つ苦労しながら、また、まずいと言いながらも、私にとっては結構な脱脂粉乳でした。

(六) 終戦直後の娯楽について

司会 最後になりますが、戦後の皆さんだ心を癒し、生きる希望と勇気を抱かせてくれた娯楽についてお伺いしたいと思います。ラジオや映画で「りんごの歌」「鐘の鳴る丘」「啼く小鳩よ」などが流行った時代でございました。それから、社交ダンスやパチンコの流行、学校から映画や芝居、サーカスを見に行ったことなど、お話しいただければと思います。

八東 松山南高

校農業科に通っていたときに学校から引率されて「青い山脈」を郡中の劇場に見に行きました。

伊賀上 松山の映画館が焼けて

しまっていたので、三津まで歩いて映画を見に行ったことを今思い出しております。あの頃は、「愛染かつら」などいろいろな歌が流行っており、映画をよう見に行きました。また神崎座(注12)にも行ったり、徳丸では村芝居に出て踊りをやりました。思い出の一つです。

二宮 学校の帰りに、大街道の新栄座へときどき映画を見に行きました。館内に隙間があり光が入って全然見えなかった覚えがあります。

水口 終戦後で思い出すのは、当時、私の事務所が南町にあったんで、昼休みになつて弁当を食べると、すぐに電車に乗って大街道へ行つてパチンコするんです。どうじゃった、こうじゃったとしやべりながら一時には帰り



写真31 「鐘の鳴る丘」の表紙(『戦後50年』毎日新聞社より)



写真32 芝居小屋から映画館に改装した新栄座(昭和25年ごろ『まつやま市民の戦中・戦後』より)

ましたが、そうして昼休みを楽しんでおりました。それから五時前になると、上司が「よい、今日どうぞ。」と言うて、お酒の話です。上司に逆らうわけにいかず、ついていつて酒を飲む。私も嫌いじゃないので付き合つて帰つてみれば、女房はええ顔せんわな。そういう事もありました。

司会 神崎座とか大坪座で映画や芝居を見に行つたお話などお聞かせ願えたらと思います。

武市 北伊予小学校から四キロほどあるんですけど、松前の大坪座へ歩いて映画を見に行つていました。そんなにちよくちよくではなかったけれど、その中に、「モンテンルパの夜は更けて」なんかを見たような記憶があります。「青い山脈」も記憶にあります。大坪座は町内に第一と第二がありました。当時は舗装されていない土埃つちぼろの砂利道を、ズラーと行列で見に行つた楽しい記憶があります。唯一の娯楽だつたと思います。

司会 ほかにサーカスなど、見に行かれた記憶はないですか。

田中 映画と音楽はずいぶん好きで見たり聞いたりしていました。テレビが始まるまでは、松山へ自転車で行つていました。もちろん大坪座には学校から連れて行つてもらつていました。その中でサーカスといえ、今の伊予銀行本店のある所が広場で、よくサーカスのテントが建つて開催されていまして、そこへよく見に行きました。オートバイで鉄球の中を走るのを「上手いこと落ちんもんだなあ。」と感心し、また「手品ちゅうのは不思議なもんだなあ。」と楽しかった記憶がたくさんあります。今でもサーカスが好きでよく行きます。

伊賀上 私は戦争が終わつて最もうれしかったことは、いろんなスポーツができるようになったことです。卓球やバレーボール、野球（ソフトボール）などです。特に卓球は青年学校の頃、昼休みや勉強が終わると直ぐ講堂の卓球台へ向かつていました。また、運動場でのバレーボールにもよく誘われ汗を流し

た懐かしい思い出です。

また、家に帰つてからは、今のようにならぬやうにグラウンドや広場がない時代でしたので、お宮の境内や稲刈り後の田んぼが遊び場でした。手作りのボールやバット、グローブで男の子の中に入つて夢中で野球をしたのが青春時代の良き思い出です。

司会 当時の高校野球についてお聞きします。

深沼 スポーツといえば復興最中の昭和二五（一九五〇）年、第二三回全国高校野球大会において松山東高校が全国制覇を成し遂げたことです。松山はもとより愛媛県中が大いに盛り上り熱狂し、県民に勇氣と感動を与えた明るいニュースでした。ラジオにかじり付いて必死で応援しました（松山第一高等学校Ⅱ現松山東高校と松山商業高校が統合して松山東高校となつていた時代）。

司会 このあたりで「終戦後間もないころのくらし」について終わりたいと思います。引き続き「昭和二〇年代後半のくらし」についてお話し合いをお願いします。

（注6）玉音放送について

天皇の声で行われる放送。昭和二〇（一九四五）年八月一五日正午に流れた昭和天皇が終戦の詔書を読み上げられるラジオを指すのが一般的である。



写真33 松山東高校全国制覇
（『松商野球部百年史』より）

終戦前日の一四日、皇居内の御文庫付属室で、ポツダム宣言の受諾を最終的に決められた昭和天皇が、同日の午後二時二五分、宮内省(現宮内庁)の内廷庁舎執務室で二回にわたり録音され、その原盤は長年宮内庁の金庫などで厳重に保管されている。

その玉音放送の原盤が、平成二十七年八月一日で太平洋戦争終結七〇年を迎えるのを前に、宮内庁が八月一日原盤レコードの音声を初めて公開した。報道機関には原盤の撮影も認めた(写真18)。

(注7) 舞鶴引揚者の手記「西舞鶴の港湾に入って『私の海外引揚』より

コロ(葫蘆)島(港)(図1地図9ページ参照)を出港した米国船リパティは、三昼夜航行して西舞鶴港に入港した。すぐに上陸と思ったが、検疫などのため、なお三昼夜停泊したままだった。停泊中の船内では素人演芸大会が開催された。(中略)

舞鶴港引揚船入港状況は昭和二十二年七月一日、米国船「リパティ二九」という引揚船でコロ島からの乗員人数は、引揚者―陸軍四百二十七人、海軍一人、一般邦人二千百人の計二千五百二十八人である。そのうち船内死亡が二人(その一人が妹)。八月の終戦時、国外に残された軍人・軍属は三百三十万人、民間人が三百万人で、その後昭和二十二年末までに五百万人が帰国した。

(注8) 舞鶴引揚者の手記「森寮について『私の海外引揚』より

舞鶴市内森にあった森寮は、引揚者の家族が国立舞鶴病院に入院した人や帰郷先が決まらない人、何らかの理由ですぐに帰郷できない人たちが、一時滞在するための施設で旧海軍の宿舎が使われた。昭和二十二年(一九四七)年にはシベリアからの引揚のときにも使用された。

(注9) インフレと食糧難について『北伊予の伝承V』より

戦後はインフレと食糧難に苦しめられ人々の多くは食うや食わずの生活となり、学童も弁当を机の中にかくして食べ、校庭の隅では弁当を持たない子供の姿も見られた。甘藷(かんしょ)の弁当、雑炊の弁当を持つて来る者もあったり、飢えの為盗みが増えたり、栄養失調児も出るようになってきた。米はおろか麦があればよい方で甘藷、南瓜の蔓上げ後の赤黄色のもの

のでも食べれるものは何でも食べた。(中略)米価も昭和二〇年には一俵(六〇キログラム)六〇円、次年度より二二〇円、七二〇円、一四七八円とはね上がっていった。ヤミ物資と、進駐軍からの物資で食料品は街に出回り始め、金と米さえあれば何でも手に入るようになっていった。

(注10) 伊予がすりについて『北伊予の伝承V』より

今出や塩屋には伊予かすりの機屋が多くありました。そこから外交員が材料を自転車を持ってきて、織り上がった反物を持ち帰ってくれるのです。農家の内職として、とても喜ばれました。一日に一反織り上げる人は遣り手で、大方の人は二日で一反か、三日で二反織るくらいでした。織り子さんは緋の着物に襷がけで、両足を交互に踏んで樋(飛び樋)の通るように縦糸を上下交差して分けます。分けた間へ樋を左右に転がして横糸を通し、ボタンボタンと箒を打って織りつめてゆくものです。

(注11) 三好正氏の「農地改革について『遺勲と追想』より抜粋

戦後の農業を考えた時、農地改革は避けて通れない大きな事業でありました。終戦後の混沌とした世情の中、いち早く取り上げられたのが農地改革でした。その目的は耕作農民の生活安定と農業生産力の維持増進を図り、農村の民主的傾向を促進して、日本民主化の基盤を創ることにあった。我が国は、敗戦により復員軍人、海外引揚者等によつて深刻な食糧難が予想され、国を挙げての関心は食糧問題であった。その解決策として土地制度を根本的に変革せざるを得なくなった。しかし、今まで日本政府のどうしても果たしえなかったこの事が、敗戦と連合軍の指令により一挙に行われたのである。この改革により解放(買収)された農地は全国で二百万町歩に及び、三百万戸の自作農家が誕生し、農村の民主化と農業の近代化の基盤がつくられた。この一大革命ともいえる大事業を無血の裡に成し遂げたことは、その成果の陰で事業に携わった関係者の努力があったこと、また、買収価格が一反歩二〇〇円―一二〇〇円という極端な安い価格の上、支払いは農地証券による年賦払いということ、祖先伝来の土地を手放すことに不満はあったが占領軍の指令であつたため涙をのんで買収に応じた地主の協力を忘れてはならないと思う。

(注12) 神崎座について『北伊予の伝承VI』による

神崎座は地域の大衆娯楽の殿堂として役割を果たしてきた。北伊予地区の芝居専門の定小屋で、その起源は農村では豊作を祈願して、個人の屋敷内で芝居・浪花節・掛け合い漫才・手品・浄瑠璃等が行われ見物の村人はムシロの上で盛んに酒宴をしながら見物していた。

また徳丸と出作の境では、役者による芝居興行が毎年春に実施されていた。また、地域ごとに大字や青年団による村芝居があつて、芝居や演劇には興味と関心度が高い地区といつてよいでしょう。そのような背景があつて神崎座が誕生したのです。

三 昭和二〇年代後半のくらし

昭和二六(一九五二)年にサンフランシスコ平和条約(注13)が調印され、日本は六年ぶりに国際社会への復帰を果たしました。

一方、昭和二五(一九五〇)年には朝鮮戦争(注14)が勃発しました。この戦争によりアメリカからの緊急調達(特需)がなされ、敗戦後の瀕死の日本の経済は急速に回復し、はからずも戦後日本の経済発展の原点となりました。

この時期は、配給制度も統制解除に向かい、人びとの関心は「食べるものから着るもの」へと移り始め、貧しさの中にも、わずかばかりのゆとりが見え始め、右肩上がりの成長の時期を迎えます。

これから「昭和二〇年代後半のくらし」についてお聞きします。

(一) 日用品の統制解除について

司会 昭和二〇年代後半は、終戦直後の食糧難とインフレに悩まされ必死に生きた時代から、やや生活にゆとりができるようになった時代と言えると思います。

具体的には、昭和二五年ころから味噌とか醤油といった日常品の統制が解除され(注15)、「食べるものから着るもの」へという時代になったと思います。その当時のくらし向きについて述べてもらいたいと思います。

丸山 小学生の頃ですが、配給制があつたでしょう。私は東古泉でしたので学校が遠いからということで靴の配給がありました。靴の配給は履き古したものと交換ということでした。私たちは兄弟がおつたから交換品があつてよかったですけど。

その次にスカートが当たりまして喜んで持って帰ったら、チクチクして履けなかったですね。

小学校六年の時に、砥部まで遠足に行きました。その頃は歩いて行きよつたからね。早速、東レのナイロンの靴下を買ってもらって履いていったんですよ、帰ったら穴があいていてね。衣類は夜中に繕ったことを覚えていますがね。食糧については親任せでしたから覚えていないです。

三好 靴のことが出ましたが、小さいころはゴムの鼻緒の下駄でした。その後一枚板のような鼻緒も硬いゴムの草履をよう履きましたな。

中学校を卒業したのは昭和一九（一九五四）年三月でしたが、運動会では中学校男子全員が東古泉の福島マートまで往復走る種目がありました。その時は舗装じゃない砂利道を皆ちり草履で走った。靴はなかったなあ。そして、中学卒業後は高校に進学して、国鉄や伊予鉄を利用しましたが、自分は松山の樽味（松山市の町名）に学校があつたんで、昔の重たい自転車のでこぼこの砂利道を通いました。いったん出合の橋まで下つて余戸に出て、それから石手川の北側の土手を通ります。高校ではゴム底の運動靴になつとつたです。

深沼 私自身の記憶ではなく、父の書いた手記の中で見ることなのですが、統制解除になって商売がまた復活した。それで街中の自転車屋は全部潰れてしまつていたので、勢い田舎の自転車屋が流行つた。いろいろな古いものをかき集めて作つては、とにかく売れた。そんな記録が残っています。

その時期には田舎の自転車屋はかなりもうけたと聞いています。それがずっと続いたというわけではありませんが。

司会 買わなければならない立場としても、統制が解けたことは大変うれしいことですよ。男性にとつて、特にタバコが解禁になったことは大きな変化でした。また、砂糖も解禁

になりました。この辺のことについてどうでしょう。

田中 私が小学校の頃、親父がヘビースモーカーで、学校から帰るとすぐに巻いてくれと言われました。赤い箸を使って紙を巻いて両端をはさみで切つて作りました。材料としてサンキライ（中国に産するドブクリヨウの俗称。また、日本にも産するサルトリイバラの俗称で、葉を薬用や柏餅に使うこともある）、松葉、後の方になるとタバコの葉を栽培していたのでそれを使った。まず松葉を混ぜて巻くんですね、松葉は蒸して油を抜いて小さく刻んでタバコの葉と混ぜていた。松葉が多いと親父に怒られた。一番よかったのはサンキライで、これと同じように葉を蒸して乾かして使った。タバコの葉は専売公社（現在のJT）がちゃんと管理していたので使うことは難しかった。タバコについては親父の思い出として相当記憶に残っています。

伊賀上 お砂糖（注16）などはね、屋敷や田んぼの空いている土地にサトギ（サトウキビ）を植えて、それを搾るところへ持つて行って黒砂糖を作つて、それで砂糖を補っていました。ほかのものは農家であれば多分大丈夫だったと思うんですが、お砂糖はわりと手に入りにくかったことが記憶に残っています。

司会 戦後サトウキビをどんどん植えていたのをよく覚えています。山王原（JR北伊豫駅南西部に広がっていた雑木に覆われた原野）の線路際に製糖所がありまして、そこへ方々からサトウキビが運ばれてきて山積みされていました。



写真34 市販されていたタバコ



写真35 サトウキビの収穫
(松前・新川 『目で見る伊予・上浮穴の100年』より)

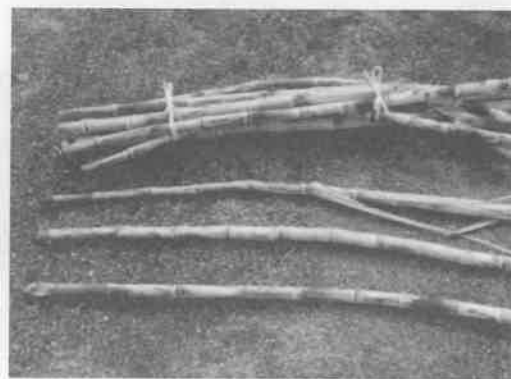


写真36 サトウキビ

伊賀上 おやつにサトウキビをかじっては吸っていた。それが一つの子どものおやつというかね、必要なものとしてよく作りました。

升田 小さい頃は麦飯を食べよった。魚はおたたきさん(古くは頭に載せた丸い桶に鮮魚を入れ、松山や近郊農村に行商していた松前の女性)が持ってきてきよったな。肉は畑の肉と言われる大豆を食べよったわい。

学校の給食が完全給食になったのは、私が北伊予中学校に赴任していた時期じゃった。私も給食を食べよった。

(二) 手作りの衣料品について

司会 この時期のキーワードの一つに、「食べものから着るものへ」ということがあるかと思えます。洋裁学校が大にぎわいでした。いわゆる手作りでございます。私はこのような形で苦しい時代を乗り切ったという思い出がありますか。

篠崎 洋裁をきちんと習ってはいなかったんですが、男物の

背広を手作りしていました。近所からも持つておいでたりして、それは忙しいくらいでした。高校の合格発表があつてしばらくするとスカート、チョッキ、上服の寸法を書いてくれるので、それを縫い上げて何日までに学校に納めてくれというので、寝ずに洋裁をしたような記憶があります。

司会 洋裁学校などに行かれた経験についてはどうですか。

二宮 私らの時代は学校を卒業してもお勤めしたらいかんということで、洋裁学校へ行きました。当時、松山には「ドレメ」と「いさみや」の二つの学校がありましたが、私は「ドレメ」に行きました。それが終わると和裁も習いました。そのお陰で戦後物資もない時代、部分縫いなどは母の着物を解いて作りました。足踏みミシンは今でもすぐに縫えるように準備しています。洋裁学校へは自転車で上三谷(現伊予市)から北伊豫駅まで行き、汽車で松山まで通っていました。今でも買い物などには使っています。

伊賀上 私もリメイク(有効活用のため不用または古くなったものを作り直すこと)と言いますか、主人のズボンを解いて子どもの上下の背広にしたりしました。近所のお店で布を買って子どものものも自分のものも全部作りました。洋裁学校へは行かなかったですが、独学で製図して全部作っていました。服を買うことはせず、布を買って縫うか、着物を解いて縫うかしました。それから、編み物は小さいころから好きでしたので、資格



写真37 自分たちで作った手作りの外出着を着る人たち(稲荷正恵さん提供)

を取って家でほとんどのものを作っていた次第です。古い毛糸を使って編み直したり、新しいものが手に入るとうれしくて夢中で編んだりしたものでした。

(三) 食生活と住宅事情について

司会 食生活の改善とか住宅関係、家庭電化のことに移っていきたいと思います。この頃ずいぶんと生活様式が変わったなという実感があるかと思うのですが。

藤野 小学校三年生の頃ですか、生活の様子というたら、蚊帳^{かや}があった時代でね。その中で家族全員が寝よった。食事でも麦ごはんを食べよった。永田に精米所があつて、しゃぎ麦^{しゃぎ}じゃなしに丸麦搗^ういてもらいよったけんね。丸麦を食べる人は少なかった。しゃぎ麦を食べる人の方が余裕があつたけんね。

司会 ほかに男性の方どうでしょう。

神野 ちょっと話がそれるかも分かりませんが、戦後父が復員してきて北伊豫村役場に勤めるようになり、片方では



写真39 元の北伊豫村役場
(昭和13年建築 稲荷正恵さん提供)



写真38 どの家にもあつた蚊帳^{かや}

農業を始めるようになって父親と二人で日曜農業をしました。終戦後、父が復員してきてから弟や妹が昭和二二年、二三
年頃から生まれて大きくなるにつれ、世の中は日常生活に余裕が出てきつつある中で、我が家は火の車になってきたような感じがします。年々、弟や妹が大きくなるにつれて厳しい日常生活になったような感じを受けておりました。そういう状況でしたから、余暇のことなんかを考える余裕は全くなかったように思います。

三好 戦後、小学校六年くらいだったでしろうか、印象に残っているのはヤミ酒、焼酎^{しょうちゅう}を買いに行かされるのが日課だったことです。親父がおらず、おじいさんが大将でやりよったんですが、二合瓶^{びん}を渡されて「さあ行つてこい。」と言われ自転車で買いに行つていました。

渡部 小学校高学年から中学校になって、その頃やつぱり食べ物に統制が解けても不足しておったんだろうと思います。というのは中学校になると「職業」という科目があつて、学校の便所から雑木林の原野を開墾^{かいこん}した山王原まで下肥を運んで、サツマイモにやつたり畑に水を引いたりしました。

また、学校田というのがあつてそこで米を作り牛、豚、ヤギ、鶏を飼っていました。ある年、学校で死んでいる豚の毛をと



写真40 山王原での農作業に励む生徒たち
(昭和10年ごろ 『北伊予の伝承第12集』より)

り除くため、湯をかけてきれいに削り、肉屋さんに送った記憶が残っています。また、校務員さんが学校のお茶を沸かすのに茶の葉がないというと、先生方が校務員さんに、学校の山にお茶の葉を採りに行く計画をしましょうと言っているのを聞いたことがあります。

それから校務員さんがお茶を沸かす薪を砥部の方へ買いに行った時に、先生が「校務員さんが薪を荷車で引つ張って帰るから、君ら手伝いに行つてくれ。」と指示され、「どこへ行けばいいんですか。」と聞くと、「矢取橋で待ちよつたら必ず通るからあそこで待て。」と言われ、それで矢取橋まで行つて待つとつたんですが見逃したんでしょうか。夕方遅く学校に帰つて先生に「校務員さんは通らなんでしょうか。」と言うと、「校務員さんはそこを通つたのに、君ら何しに行つたんだ。何をしようたんだ。」と怒られました。

結局、食べるものも昭和三〇年くらいまでは窮屈じやつたんだらうという感じがします。学校ではそんなこともやつていた覚えがあります。

司会 今、実習の関係の話が出ました。学校には実習の畑や田んぼがありました。さらに山林があつたということですが、それにまつわる思い出があればお聞きしたいと思います。

田中 山があつたというのは大谷池の方ですが、しよつちゆう下刈りに行きよつた。木を伐採して新しいヒノキを植えるわけですが。そこに



写真41 元の北伊予小学校校舎 運動場脇にある懐かしい便所とせんだんの木
（『北伊予の伝承第12集』より）



写真42 灌漑用のため池・草田池（東池）
（『ふるさとをたずねて』より）



図2 草田池の略図
（大政邦和氏作成『松前史談』より）

桜の木が一本あつて、その桜の木にムササビがおつて、これは食べられるということまで下でじつと待っていたら、パッと飛んでいっておらなくなつてしまった。そんな経験があります。

また、南側の尾根に赤松や黒松が生えていて、そこには松茸がいっぱい生えていた。皆でたくさん採つて喜んで持つて帰つた。あくる日学校へ行つたら、先生が松茸を持つて帰つた者は全部来いと言う、あれは採つちやいかんものだと一週間ぐらい怒られた。そういうえば荒縄で区切られておりましたわい。そんな経験があります。

お茶の話ですが、茶葉はすぐには生えんのです。ですから畔道にいっぱい生えている「豆のなる草」を刈つてかえつて自分たちで蒸してお茶代わりにしていた。結構飲めましたね。

便所は水洗などではなく当然汲み取りでした。当時は松山から下肥（糞尿）を買いに來ました。買った人は持つて帰つて野ツボへためて田畑の肥料として撒いていました。そういう

時代でしたね。もちろん自分とこでも使いましたが、当時は下肥を買ってくれる時代でした。

司会 山王原あたりのこと、あるいは学校の運動場をかつてはイモ畑にしたというお話についてはどうでしょう。

田中 山王原やイモ畑の話はずいぶんと記憶に残っていますかね。食べ物がないというのでサツマイモを植えるイモ畑を作りました。学校の運動場一面に、草田池(注17)の底の土を家から持ってきたりヤカーで運んで作った。人力というても大勢おつたら大したもの、きれいな畑ができました。そこへサツマイモを植えて作ったわけですが、結構できよりましたですよ。

私の時は牛は飼っていたが、ほかのものはいなかった。先生が理科の解剖実験をするので農舎の方へ来いと言うので行ったら、どこからか知らんけどトラックで大きな生きた豚を運んできた。担当の先生がサラサラサラと首を切つて、首をポーンと落として、一応言い訳ごとに腹を切つてこれは心臓じゃ、これは何々じゃ、という程度で終わり、食肉にしてしまいました。そういう食糧事情ですから仕方がなかったんでしょうが、そんなことの繰り返しで随分いろいろなことを経験しました。

(四) 医療について

司会 次に医薬品・医療関係、それと出産についてお願いします。

丸山 父が書き残したものにありますが、終戦後に赤痢が流行った時に胃の中を空にしたら赤痢菌も死んでしまうとかいうこともありました。薬の名は忘れましたが、その薬を注射したら治るというので、一年分のお米と交換で、どこかか

ら仕入れてきて命が助かったとか、兄がジフテリアにかかった時に松山にいいお医者さんがいるというので連れて行ったら疎開しているというので三津の方まで行きましたら、またどこかへ疎開したと言うので伊予市まで行つて治療を受けたという記録を残しておりました。

二宮 子どもが病氣になった時は松前の近澤先生の所へ自転車とか單車に乗せて連れていきました。單車に四人くらいが乗つて。当時はお巡りさんに見つかつても、病院へ行くと言つたら、気を付けて行つてくださいよと注意されるだけでした。

また、二人の子どもの出産は横田の山崎さんのお世話になりました。当時、大溝の人は山崎さんをお願いする人が多かったです。

西影 私には三人の娘がいますが、末娘が昭和三四(一九五九)年生まれですが三人とも全て自宅出産です。お産はいつになるかわからなかったので苦労しました。私は鶴吉ですが夜中に横田の助産師(産婆)さんの所へ走つていきました。そしたら助産師も自転車で来ましたが、出産直前にやつと間に合うという状況でした。

深沼 私の叔母が助産師をしておりました。手広くやっており二千人くらいを取り上げたと聞いています。当時は交通手段は全部自転車でしたが、南伊豫(伊予市)から岡田、北伊豫、さらには松前あたりまでの広い範囲を自転車で行き回ってお産のお世話をしていました。ある時期叔母も自転車で大けがをしたことがあるんですけど、大変な仕事



写真43 孫を抱く助産師の深沼ミチコさん(昭和55年)

でなかったかと思ひます。

それとは別の話ですが、子どもが病気になると父はすぐに家にある医学の本を取り出して、それを見ては家でできる治療をしておったと思います。私が中学校の時、病名は忘れましたが目の病気ですと日赤に通っていました。しかしよくならないんですね。その時にある人から松前の地蔵町の「ほていや」に良い薬があるというので買いに行きました。貝殻に詰めた墨のように真黒な薬でしたが、その薬をつけたらこれが出てき面に効きました。そんなことがありましたんで、昔の薬とはいえそれなりの効果があったと思つています。

司会 医薬品のこと、家での治療のことも出てきました。当時は置き薬(注18)というのがあつて、年に一、二回富山から来て薬を入れ替えていました。あるいは、各家庭ではセンブリをはじめ薬草で治していたこともあると思います。今の子どもたちには考えられないことですので、その辺のところをどうなにかお願いします。

武市 富山の置き薬はわが家では高級過ぎたので、薬草で自家製の薬を作っていました。ゲンノショウコは下痢、オオバコは風邪に効きます。ドクダミも干して乾燥させて作り、子どもの頃はほとんどこういうもので治していました。

私、この指、稲刈りして切ったんです。徳丸の林先生の所に行ったんですが、多分いなかったかなんかで治療を受けられず、自分でじつと



写真44 袋に入った富山の置き薬
(久万高原町 山村歴史館)

握つて赤チンだけで治しました。子どもの頃には、こんにち今日お医者さんからもらいうようなお薬を使った経験はないです、ほとんど薬草を使つていましたね。

八束 うちも三人娘がいるんですが三人とも助産師さんに出産をお任せしました。

それからお薬の話ですが、以前から富山の薬を置いておりました。富山のお薬が止んでからは、現在もほかの置き薬を使つています。

伊賀上 先に出ました薬草ですが、ほかにヨモギもよく使いました。それから、置き薬は富山と砥部の薬屋さんと二つ置いてありました。背中に大風呂敷をかついでくると、私たちが子どもはおまけの紙風船をもらえるのが楽しみでした。大きい方、小さい方と言ひ合いながら妹と取り合つたものです。薬屋の名前の入った大きな袋を柱につるしていたのを思い出します。

司会 北伊豫村には、医者の方とその後の方、歯医者の方、塩崎さんしかいなかったのでしょうか。当時は盲腸になつたという大変な騒ぎだつたことを覚えていらっしゃるんですが、我慢するわけにはいかないんですね。その辺のお話をお聞かせください。

伊賀上 私は林先生とこの近所なんです、私の父は私が三歳の時に亡くなりました。自分は当時のことはつきり分らないのですが、叔母が盲腸(虫垂炎)で亡くなつたんじゃないと言つていました。その頃、林先生はまだ開院してなかつたし、県病院(現愛媛中央病院)へ連れて行くといふことになつた。その時、中川原橋は板張りでリヤカーに積んで連れて行つたが、着いたら亡くなつた。今頃は盲腸で死ぬなどと考えてないでしょ。普段は近所でしたから林先生の所へすぐ駆け込んでいました。鎌などで手を切つて縫つてくださるとき、当時は

麻酔をせずに処置されましたから、大変痛い思いをしたのを思い出します。

私自身も子どもができるようになっていた頃です。お腹が痛いのでリヤカーで山地さんとこまで行ったんですが、お腹に炬燵こたつを入れて行ったものだから盲腸が破裂してしまいました。お腹に子どもがおるでしょう。これはもう松山へ行つて手術せないかんということで手術してもらい、うまくいって今の長男が生まれ元気に育ちました。今頃は盲腸は何でもない病気ですが、昔は盲腸で死ぬことも多かったということを実感しています。

(五) 娯楽について

司会 最後にお伺いしたいことがあります。『経済白書』ではや戦後ではない(注19)といわれたのが昭和三一(一九五六)年です。

私自身のことを考えてみますと、生きる希望を持ったのはラジオと映画の力であつたと思います。特にラジオの力がいかに大きかったことか。このころは、ラジオでは「君の名は」、映画では「二十四の瞳」も人気でした。このあたりを振り返っていただいて、ラジオや映画が人生にどんな意味を持っていたのか、どんなあこがれを持ち次の時代に



写真45 話題になった映画「二十四の瞳」と「君の名は」のポスター
(『戦後50年』毎日新聞社より)

つながっていったのか、このことについてぜひ聞かせていただきたいのですが。

渡部 あの頃のラジオは真空管のラジオでありましたので音が非常に悪かったし、話しやる中身が聞こえにくかった。ラジオ(注20)では、花菱アチャコはなびしあチャコが出てくる番組が面白かったです。もう一つは何気なく聞く音楽が生活の中に入ってきました。また、ラジオを聞きながら何かをするという生活場面が多くなつた感じがします。

西影 先ほど出ました「君の名は」は熱心に聴きました。全国的に流行はやつて、あれが放送される時間帯は風呂屋がガラガラになつたという話を聞きました。

深沼 松商(松山商業高校)の優勝戦の時のことを覚えていますが、エースの空谷投手そらたにが、今の投げ方と随分違うと思います。手が大きく何回も回して投げるんですよ。その様子をアナウンサーが実況していました。当時の緊迫したアナウンサーの声がいまだに頭に残っています。



写真46 全国制覇した松商ナイン
(昭和28年『松商野球部百年史』より)



写真47 高知・土佐高との優勝戦の模様
(『松商野球部百年史』より)

それと娯楽関係では「上方演芸会」を楽しみに聴いた覚えがあります。またラジオドラマもずいぶん聴きました。

武市 ラジオのことで記憶に残っていることは、何気なく耳に聞こえてきた「ラジオ歌謡」で、歌いやすい歌が結構流れていたんです。NHKの「のど自慢」なんかで歌われる曲が多かったですね。のど自慢では松前町の明石光司さん(後にビクターからデビュー)が「ブラジルの太鼓」を歌い日本一になったのが中学生の頃です。

二宮 当時の楽しみと言えば、一緒に学徒動員に行った仲間たちと頻繁に交流していたことです。家に伺ったり、松山で会ったりしておしゃべりをするのが楽しみでした。今でもそのお付き合いは続いています。

司会 時間がきましたのでこのあたりで座談会を閉じたいと思います。長時間にわたり貴重なお話ありがとうございました。

(注13) サンフランシスコ平和条約

昭和二六(一九五二)年九月、サンフランシスコで対日講和会議が開かれ、日本と四八か国の間でサンフランシスコ平和条約が調印された。日本は六年ぶりに独立国としての主権を回復し、国際社会への復帰を果たす。ただし、ソ連、中国、インドなど入っていない国もある。

(注14) 山本庫市氏の「昭和の装い」「北伊予の伝承Ⅷ」から抜粋

(前略)昭和二五年に勃発した



写真48 着物地の伸子張
(『えひめ、その装いとくらし』より)

朝鮮戦争により、特需景気で幾らか生活にゆとりができ、気持ち衣生活に振り向くようになり、娘さんが洋裁学院に行くようになりました。田舎では呉服反物やスフや木綿の服地などを、大風呂敷に包み背負った行商の姿を見かけるようになりました。もともと田舎の家庭では和服や布団は自分で洗濯し仕立てる自給の手法が受け継がれており、夏の農閑期に和服や布団をほどこき木綿は板張り、絹物は伸子張の方法で洗い張り縫い直しをしていました。(後略)

(注15) 日用品の統制解除

昭和二二(一九四七)年施行の物価統制令は戦後のインフレにあたり、物価の安定を確保して国民生活の安定を図ることを目的とした。戦後の復興が進むに連れて解除され、昭和二七(一九五二)年にはほぼ撤廃された。

昭和二五年 魚、みそ、醤油の統制解除 タバコの配給廃止

昭和二六年 雑穀の統制解除 衣料の配給廃止

昭和二七年 麦の統制解除 砂糖自由販売

抜粋 (注16) 神野弘良氏の「終戦直後の食糧難のころ」「北伊予の伝承Ⅷ」から

(前略)太平洋戦争も連合国軍の攻勢で南方から砂糖が入らなくなってからは、砂糖菓子類は全く口にすることはありませんでした。そのため、各家庭では、お節句などに柏餅を作る時、サツマイモを蒸してそれをすりつぶしてあんこに使っていました。サツマイモのほのかな甘さでおいしく食べていたことを思い出します。

昭和二二年前後に砂糖に代わるものとして、サッカリンやズルチンと言った甘味料が使われるようになりました。これは、薬の錠剤のようなもので、口に入れると甘く感じるものでしたが、砂糖のような甘さとは違うものでした。その後、昭和二五年前後ごろから各農家では、田に砂糖木(サトウキビ)を栽培し、それを秋に収穫し、リヤカー(荷車)に積んで砂糖の加工工場に持っていく、木樽に入れた黒砂糖と交換してもち帰って、久しぶりに砂糖あんの餅を作り食べた時の味は今も忘れることがで

きない思い出です。それ以後、店頭にも砂糖の入ったお菓子が出回るようになりました。

(注17) 済川善四郎氏の「まぼろしの草田池」『ふるさとをたずねて』から抜粋

(前略) 鶴吉地区の南部は標高差の関係もあり、前記伏流水の利用が困難で、伊予市上野地区の余り水を細々と利用するのが現実であった。

これを補強するため、鶴吉の南東部、上野地区との境界線にそって草田池が作られた。池は松前町で最大のもので、東西二つに分かれていた。

取水は長尾谷川の水で、はじめは西池の南から取水していたが、後に同池の西に変えられた。(中略)

池の中には数々の植物が繁茂していた。中でも子どもたちが喜んだのは「ひし」で、泳ぎながらその実を採るのである。また、堤防の広い草原は格好の遊び場で、北伊予小学校の子どもたちは、時々ここに連れてきてもらった。北伊予校区の年配の方々は御記憶のことであろう。

ところが、道前道後水利開発事業が完成。この方面にも面河村の笠方ダムの水が来るようになって、水に対する心配は解消した。そこで農民のいのちの綱であったこの草田池も不要となり、昭和四九(一九七四)年、完全に消滅し町民運動場として帰り咲いた。そして、今は町民の健康増進に町民の親睦に役立っている。(後略)

(平成二七年一〇月現在、平成二九年開催される愛媛国体のためホッケー用グラウンドに造成中)

(注18) 水口義一氏の「富山の置き薬」『ふるさと回顧』から抜粋

富山の薬屋さんが当地方の各家へ置薬を置きに秋から冬にかけて来ていた。一年毎に薬を取り替えに来るのだった。その期間に飲んだ薬の代金を支払い、少なくなつた薬や必要な薬を置いて帰るのである。竹で編んだ四角い箱を大小重ね、黒い大きい風呂敷包みを背負い、来ていた。子供がいたら四角の紙風船やちよつとしたおもちゃをくれていた。

又、大島から本物の「あんこ」(大島娘)か、どうかは知らないが、椿油売りの女性も時々来ていた。

(注19) 「もはや戦後ではない」

昭和三〇(一九五五)から昭和三二(一九五七)年にかけて、日本経済は神武景気と呼ばれる大型景気を迎えた。政府は昭和三一(一九五六)年の『経済白書』で「もはや戦後ではない」と締めくくった。この後の四年間も好景気となり、岩戸景気と名付けられた。

(注20) ラジオ番組、映画、歌謡曲など

昭和二五年 金へん糸へん 水色のワルツ 買い物ブギ

昭和二六年 紅白歌合戦放送 越後獅子の唄 夜来者

昭和二七年 新諸国物語 ニコライの鐘 りんご追分
笛吹童子 君の名は テネシーワルツ

昭和二八年 雪の降る町を 街のサンドイッチマン
昭和二九年 ゴジラ 二十四の瞳 お富さん 岸壁の母

昭和三〇年 お父さんはお人よし 高原列車は行く
三つの歌 夫婦善哉 この世の花 田舎のバス
四八歳の抵抗 ガード下の靴磨き

完

座談会を終えて

出席者の皆さまの温かいご協力を得まして「戦後七〇年北伊予のくらしを辿る―明日への希望を抱いた昭和二〇年代―」の座談会を終了することができました。ご高齢の方も多く、さらに猛暑の中、長時間にわたり大変お疲れさまでした。

あの忌まわしい太平洋戦争が終結して今年は七〇年、終戦前後の北伊予のくらしについて、貴重なお話をお聞きすることができました。

座談会の内容につきましては、平成二八年三月発行の『北伊予の伝承 第一三集』に掲載させていただきます。

編集に当たり座談会終了後、座談会当日欠席された方や座談会后、個人的にお聞きした方の内容も適宜、追加・挿入させていただきますのでご了承ください。

しかし、体験不足で未熟な司会のため、直接体験されたり、お聞きになった事柄を十分理解し反映することができたかは、はなはだ心許ないのですが、今回の座談会の内容を後に続く戦争を知らない世代の人たちに、皆さまが戦中・戦後必死に生きてこられた証として伝えてまいりたいと存じます。

言葉だけの伝承では、ややもすれば曖昧になつてしまう恐れがあります。私たち編集委員会では、伝承を文章や写真・図表の形として、次の世代に伝えてまいります。

今回、第一三集となります『北伊予の伝承』も、まさしくその形です。言葉では伝えにくく薄れゆく〈記憶〉を、文字や写真で生きた形〈記録〉にしてみました。形は心に残り、言葉よりもしっかりと正確に心に刻まれ、かけがえのない貴重な資料となることと確信しています。

(編集委員長)

Ⅱ 御祈禱

御祈禱とは

御祈禱は、組祈禱ともいい神職か住職を迎え組中安全、家内安全、五穀豊穰を祈願し、組中の行事の決定や役員を選出し懇親会を行う新春の年中行事である。ところによれば「お日待ち」、「氏神講」といわれるが、ほぼ同じ行事である。表1のごとく北伊予九地区のうち八地区が御祈禱を行い、主に正月の寺祈禱と夏の宮祈禱がある。

現在、宮および寺祈禱の両用で行っている地区は、中川原、出作、鶴吉の三地区のみ。住職による寺祈禱のみで行う地区は、徳丸、神崎、横田、大溝、東古泉の五地区である。理由は不明だが、古くから永田地区は北伊予地区内で唯一、御祈禱が行われていない。

表1 現在の北伊予地区の御祈禱

大字	宮祈禱	寺祈禱
徳丸	—	○
中川原	○夏	○正月
出作	○正月	○1組
神崎	—	○
鶴吉	○夏冬	○正月
横田	—	○
大溝	—	○
永田	—	—
東古泉	—	○

このように同じ北伊予地区内でも大字により祈禱の方法や内容が異なるのは、藩政時代独立した「村」として自治活動や年中行事を行ってきたことによると考えられる。

今回、北伊予の伝承編集委員会では、各地区の御祈禱の経緯や現状についてまとめ、改めて北伊予地区の伝統行事である御祈禱を見つめ直したいと考えた。

かつて、広く行われていた「お日待ち」は、組中安全、家内



写真1 神職による御祈禱（出作地区）



写真2 住職による御祈禱（神崎地区）

安全、五穀豊穰を祈願し、前日から宿（個人の家）に組の住民が集まり、夜通し寝ずに話したり、酒を飲んだりして時を過ごし、日の出を待って祈禱した行事である。江戸時代にできたといわれ、農作業、慶弔行事など、すべて講中（組）単位で行われていた組中仲間のコミュニケーションを図る大切な場であった。「お日待ち」が終わると「四方札」（境札、関札）と呼ばれる四枚の御札を村（組）の東西南北（境・関）に悪病等が入り込まないように立てた。四方札とは、北（多聞天）、東（持国天）、西（広目天）、南（増長天）を守護する四枚の御札である。名称は様々だが、現在も各地区で行われている。

時が流れ、住宅事情、職業や価値観の多様化、信教の自由など、住民の生活様式や意識の変化に応じて、元来の御祈禱の内容から大きく変容してきた。とくに実施日、場所、贈など、共同体としての色彩が薄れ簡素化が進行している。近隣関係が希薄化しつつある今こそ、コミュニティ作りの場として御祈禱の重要性を見つめ直す時かもしれない。

なお、各地区の概況で記した世帯数や人口などは、区長から提供された平成二七年度当初の資料を使用した。

一 徳丸

(一) 地区の概況

徳丸は松前町の北伊予地区にあって最東部に位置し東に砥部町、南に伊予市、北を重信川が流れ、その中心に創建二千余年前といわれている延喜式内社である高忍日売神社と真言宗豊山派本性寺が隣接している。かつては農業中心の地域であって数多くの宗教的行事が行われてきたが、現在では団地が出来、戸数が急増し非農家の割合が高くなった。平成二十七年九月末現在の世帯数四二四戸(内農家九四)、人口一四三三人、組数一八である。

(二) 御祈禱

御祈禱とは「大般若波羅蜜多經」(注)六百巻を讀誦する法要であり、その讀誦は「転読」(写真4参照)という独特の読み方をする。したがって御祈禱の正式名称は「大般若転読会」と言い、本来は多くの僧侶が手分けして、六百巻全てを転読するものであった。

1 寺の行事

御祈禱は、寺と大字の年初めの行事であり、一月二〇日に行われていた。徳丸の本性寺においては古くには隣接寺院五か寺出仕のもとに、本堂で文政二(一八一九)年、八東嘉右衛門より寄進された「大般若波羅蜜多經」百巻を転読した後、檀



写真3 「大般若波羅蜜多經」百巻

に入れ二人で担いで各組を回り、人々はその下をくぐり無事息災を祈ったものである。

また田の周辺を回ると虫がつかないと信じられていたが、明治末期頃に廃止された。現在は本性寺では住職が一人で二〇巻を転読している。本来は仏教行事であった大般若転読会が、いつしか民間信仰と結びつき「大般若波羅蜜多經」百巻が厄除けの靈力を持つと信じられるようになり、

転読によつて靈力を得た「大般若札」が、家内安全、息災延命の力を持つとされ、組内の各家庭に配られるようになった。

2 組の行事

戦前から戦後間もないころには住民がこぞつて寺で転読を受けた後、それぞれの組宿に組内の家族が集まり男性は買い出しに女性は賄いをした。娯楽の少ない時代であり、花札や将棋をし、また、素人の浪曲師や芸人を呼ぶ組もあり朝早くから一日中酒宴を楽しんでいた。当時は上から沖組、田中組、千防組、中組、西組、下組、河原組の七組である。ほとんどが農家で、住宅は大きく、納屋や牛小屋がある広い屋敷に立派な門構えの家が多かった。

戦後になって疎開して定住したり引き揚げてきたり、復員して本家から分家して新宅するようになり、核家族化が進み家族構成が変化してきた。また非農家の増加や資材不足等で住宅の形態が変わり、生活中心の住宅に変わってきた。

昭和三〇年代に入ると町村合併による町の都市計画に伴い



写真4 本性寺住職による転読

団地が出来て急激に住宅、人口が増えていった。

御祈禱も組の代表二、三人が転読を受け「大般若札」を頂いて各組宿に持ち帰り、女性たちの手料理で昨年の無事を喜び、今年の息災・繁栄を祈って懇親を深め、組の役員改選や年間行事等の申し合わせを行うようになった。

その後、以前の組の外側に新たに次々と団地が出来て、天王組(五二戸)、植木ノ元組(三四戸)、国鉄組(二四戸)、南二組(一五戸)、出渕東組(一一戸)、出渕西組(二〇戸)、佐原田組(一二戸)、の七組(二六八戸)が誕生した。全戸非農家である。また、以前の七組も、分家や子どもの別居、転入者の組入りなどにより戸数が増加し、沖組(二三戸)、裏組(二四戸)、表組(二三戸)、千防組(二三戸)、出口組(二七戸)、宮浦組(二三戸)、中組(二五戸)、南一組(一八戸)、北組(二四戸)、下組(二三戸)、河原組(二三戸)、の十一組(二五六戸)に分かれ、農家と非農家が混在している。

御祈禱は各組で同一的に行われていた。しかし、転入者が増え非農家が増加して、現在では農家の割合は二〇％程度となり、組宿で行っているのは農家のあ



写真6 集会所での御祈禱(下組)



写真5 組宿での御祈禱(表組)

る数組で、ほとんどの組が集会所などの公共の施設を利用するようになった。その内二組では「御札」を受けない新年会の形で行われており、本来の御祈禱のしきたりが失われ宗教行事としての感覚が薄れている。形態も変わり、組ごとに独自の方法で行われるようになった。中には御祈禱でなく組の総会や新年会の形式をとっている組もある。今では一月二〇日に近い日曜日に行われるようになった。勤めの家庭が増えたためである。この日は各組で組宿を決めたり集会所や老人「憩の家」などの公共の施設を利用し、年初めの寄合をもち役員改選や組の年間行事などの相談や申し合わせなどを行い、組人の懇親会を催す。また、この日でなく別の日に行っている組もある。以前は女性が集まり料理を作っていたが、現在ではほとんどの組が仕出しをとったり料理屋などを利用するようになり、また、茶菓子程度で済ませる組もあり簡素化されてきた。今ではほとんどの組が一戸一人の参加になっている。なお、正式に御祈禱として行っている組は組長が代表で本性寺において用意された無事祈禱の御札を受けて各戸に配っている。



写真7 家庭に配られる「大般若札」とお供え物

(注) 大般若経は大乗仏教の中心的な教えの一つである空の思想を説いたお経であり、インドから玄奘三蔵により中国に持ち帰り翻訳されたお経である。また、この六百巻を簡潔に要約して説かれたのが「般若心経」でアジア各地で唱えられている。

二 中川原

(一) 地区の概況

中川原は北伊予の北東にあり、北は重信川の南岸、東と南の一部は徳丸に接し、南西は出作に接する。平成二七年九月末現在、世帯数四五三戸、人口は一二〇〇人、内農家は一一五戸となっている。昭和五四年頃から戸数の増加により一一番組ができ、平成以降も増加し、現在一四番組となっている。

(二) 御祈禱の現況

中川原における御祈禱は、正月は寺祈禱で夏は宮祈禱である。

1 正月の寺祈禱(仏事)
宗金寺の先代住職水本俊雄さん(大正一一年生まれ)に寺の行事について聞いた。

「先代の住職が昭和二二(一九四六)年に亡くなり、地区総代より中川原に住職がいらないのは困るというので、昭和二三年高知から着任した。

御祈禱については、翌年の昭和二四年から実施したが、以前からもあったと聞いている。当時は一月五日であったが、昭和三二年より一月三日に変更となり現



写真8 御札と新年の御祈禱(宗金寺)

在に至っている。宗金寺の住職が各組(二〇組)の宿元を回って無病息災、家内安全、五穀豊穡の祈願をしていた。読経は『仁王護国般若波羅密多經』である。

当時、御札は墨をすり、一枚一枚手で書いていたが、昭和三四年より印刷した御札となった。隔年ごとに一番の組からの年と、一〇番の組から回る年と順番を決めて実施していた。午前八時から徒歩で組を回りはじめ、午後一時頃までかかっていた。そうである。

住職の高齢化に伴い一五年くらい前から現在は大字役員、各組の組長が寺に集まり祈禱を受け、各組御札をいただき組内に持ち帰るようになった。

また昭和から平成当初、各組(一番から一〇番)は宿元に朝の八時頃集まり、食材を買ってきて手作りして食べていた。おむすび、汁もの、酒、ビールなどである。その頃はまだ中川原にも個人商店が数軒あり、地元の店から食材を調達していた。どここの組も正月の調理担当は概ね男性が努め、その他の人は寒いので宿元の空き地を探し、焚物を集め暖をとって談笑していた。料理が出来上がると、座敷へ上がり組長さんの発声で新年のあいさつを交わし、翌年の世話

人の人選や一年の行事予定を決めている。

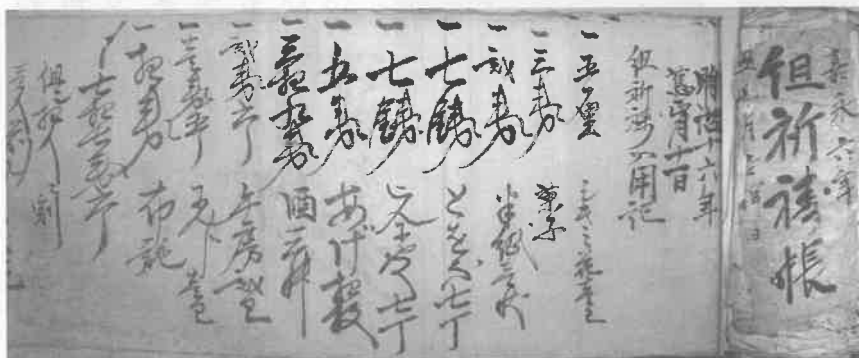


写真9 「組祈禱帳」(嘉永6年)と「入用記」の内容(明治16年)

2 夏の宮祈祷(神事)

(1) 会場

高忍日売神社の末社である中川原の素鷲神社にて、午前八時より神職をお迎えし神事を行っている。

(2) 実施日(七月一三日)

いつの時代から御祈祷行事が行われていたかは不明であるが、嘉永六(一八五三)年の「組祈祷帳」が現存することから、幕末頃から始まったのではないかとの話がある(『北伊予の伝承第Ⅸ集』より)。

しかし時代の変化で兼業農家が増え、男性の参加者が少なくなり、仕事の都合を考慮して、平成一六年から七月一三日に近い日曜日へ変更になった。

(3) 行事内容

祭壇には鏡餅、米、御神酒、塩水を入れた小皿、魚(鯛)、それに季節の野菜や果物等をお供えする。また、当日は各組より清酒を一本ずつ持ち寄り祭礼が始まる。なお、各組が持ち寄ったお酒は持ち帰り組内でいただく。参加者は社寺係、大字役員、各組長で一般の参列者は少ない。祭礼は半年間の穢れを祓い清め、田植え後の五穀豊穡、夏の虫除け、無病息災、家内安全等を祈祷する。神職に続き地区の代表者が玉串奉奠を行う。その後神職より祈祷にまつわる歴史や伝承等のお話があり、境内に集まった全員が拝礼して祭礼は終了する(『北伊予の伝承第Ⅸ集』より一部抜粋)。

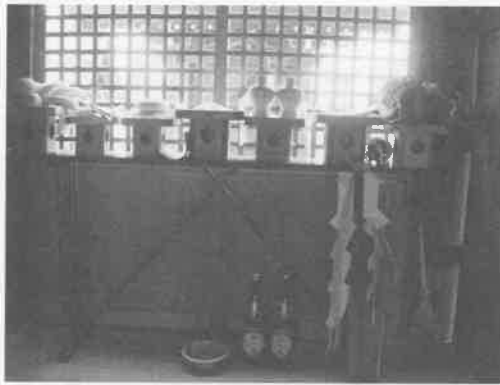


写真10 拝殿の供物

(4) 料理

料理について、加藤勇さん(昭和五年生まれ)に聞いた。

「昔は夏も手作りで料理していた模様である。しかし、いつの時代からかその日はキュウリを食べない習慣がある。理由は素鷲神社の社紋がキュウリだからと、昭和五九年発行の加藤敏之著『ふるさと』に記されている。」

さらに、加藤勇さんの組(三番)では「昔は川の水も澄んでいて、川の魚を捕って酒のつまみにしていた時代があったそうです。しかし、現在ほとんどの組は仕出しや簡単なつまみを酒の肴にして懇親を深めている。」

(5) 内容

ほとんどの組では半年が経過した後の会計報告や八月以降の行事予定等を話し合っている。協議内容は昔も今もそう変わっていないようである。所要時間は短縮し概ね午前中で終わっている。

(三) 変容する御祈祷

組によれば高齢化の進展により戸数の減少も見られる。また一番から一〇番は農家が多く、転入した人は新築した組への転入は難しく、そのため一番から一四番が受け皿となっている。また新規住宅事情により、広い部屋が少なく部屋数が限られ、参加者全員が入れない等の理由から、組によれば公民館を利用して懇親会を実施している。

(大政博 記)

組祈祷経費等控	
一、金 五万二千三十円也	
平成八年七月十三日	
住居し料理枝豆、バナナ	
にぎりめし、ビール、ジュース	
寄贈者	
清酒一本 中川原社寺係	
ビール一本 三番組より	
ビール一本 大政博氏	
清酒一本 加藤清秀氏	
一、金 七万九千四百六十六円也	
平成九年一月三日	
住居し料理、豚汁	
赤飯、ビール、ジュース	
寄贈者	
清酒二本 中川原社寺係	

写真11 近年の組祈祷経費等控(平成9年)

三 出 作

(一) 地区の概況

北伊予駅の南東から北西にわたる地区で、地区の西部を予讃線が通る。平成二七(二〇一五)年四月現在、戸数三二五、人口八〇二人、農家戸数五一、組数は一二である。

昭和三〇(一九五五)年代から戸数の増加により組数が増えた。恵依彌二名神社の東に新しく二名組ができ、南組からは東組が分かれ、さらに東組からみゆき組が分かれた。山郷寺組は山郷寺東組と山郷寺西組に、西組は西南組と西北組に分かれた。沖台は、沖台上組と沖台下組に分かれ(写真12参照)、さらに沖台上組が沖台上組と沖台中組に分かれ、現在は沖台上組、沖台中組、沖台下組の三組になつてゐる。それに北組と駅前組を加えて一二組である。

(二) 御祈禱の現況

1 実施状況

平成二七年現在、出作一三組の内、新年の御祈禱の集會を持つてゐるのは一二組である。二名組は平成一四(二〇〇二)年一月まで実施したが、話し合いにより翌年からとりやめた。山郷寺東組と山郷寺西組は、分離した後も親交を深めたいといふことで、冬の御祈禱と夏の庚申さん(青面金剛や猿田彦を祀る。仏教、神道、道教とが混交した庚申の日に行う民俗的

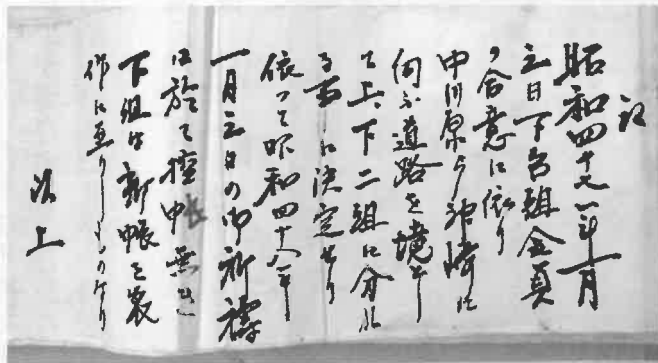


写真12 沖台下組の新帳「沖台下組控帳」(昭和48年起)

祭事)とは共催している。

2 仏式と神式

仏式は出作の真言宗高照山吉祥寺の住職、神式は同じく出作の恵依彌二名神社の神職による。吉祥寺の御札を受ける組は以前より減少して現在は東組のみで、他の一一組は二名神社の御札を受けている。

二名神社の御札を受ける組の内、一〇組が当日二名神社の神職によるお祓いの後、組の周囲の東西南北用(写真13参照)と各戸用の御札を受ける。みゆき組は、前年の暮れに二名神社に依頼しておき、当日御札をいただいて、話し合い、懇親に入る。

3 日時

古くは旧暦の正月三、四、五日であった。現在は全組新暦で行う。南組は一月三日であるが、ほかの組は、一月第一土曜日から日曜日としている。ただし、その日が正月三が日にあたる場合は第二週とする。理由は勤め人の増加や各家庭の正月行事と重なることなどである。そのため、集會所を使う組については希望日が重なることになるので、前年の組長会で時間帯と部屋を調整し、神職の了承を得て決定する。

4 場所

本来は「お日待ち」行事に由来し、「宿元」の家で実施していた。しかし、住宅事情等により、平成二七年一月現在、組長の家で行う沖台上組のほかは、神事のみ宿元の家で行う北組を含めて吉祥寺や出作集會所を使っている。



写真13 四方(境)札

○ 吉祥寺の通夜堂(仏式・神式とも利用)

- ・ 東組(寺の御札をいただき協議と懇親に)
- ・ 南組(神事を行い協議と懇親に)
- ・ 北組(神事は宿元の家 協議と懇親は通夜堂)
- ・ 集会所の大小の三部屋(現在は神式の組のみ利用)
- ・ みゆき組(宮の御札をいただき協議と懇親に)
- ・ 次の組は神事と協議・懇親を行う。

山郷寺東組と山郷寺

西組(共催)

西北組 西南組

沖台中組 沖台下組

駅前組

5 供物 所要時間 内容

組によって異なるが、神事に当たっては各組が自分たちの時間に合わせて、次のようなものを部屋に準備する。

注連縄 酒 米一升 するめ

塩水と南天の葉 魚(鯛)

乾物 野菜 果物など

年によって、一日に七組が神事を依頼する年もあるので、集会所の大小の三部屋を使い、午前九時から始める。そのため、割り当てが約一時間という組もある。部屋を最後に使う組は適宜終了する。

内容は、神職の祝詞とお祓いの後、御札をいただき、その後の協議は、組の転入者紹介、会計報告、



写真15 神事のお供え物



写真14 沖台下組の集会所での神事

ゴミ処理など組内の問題、年間行事の報告と反省、次年の組長ほか当番の決定等が多い。あと懇親に移る。

6 料理と食材

北組の「祈祷連名簿」では、明治四〇(一九〇七)年の食材の支出に、酢、あげ、こんにゃく、豆腐、かき、みかん等が見られる(写真16参照)。昭和になつてからは、組ごとに、牛肉のすき焼き、皮鯨の酢みそ和え、刺身、湯豆腐、大根のなます、牛肉や野菜のぼっかけ汁その他の献立がある。野菜や米は当番で用意したり自家製を持ち寄ったりした時期もある。現在では、茶菓から二千円台の仕出し弁当まで様々である。費用は、年間の諸費を各戸から一括して集めた組費から支出する組が多い。当日出席者から徴収する組もある。

7 各組の御祈祷

東組の組長、重松弘泰さん(昭和一四年生まれ)に聞いた。「東組は昭和四二(一九六六)年に南組から分かれて八軒で出発しました。昭和四六(一九七一)年には組の東部(徳丸側)が分かれてみゆき組になりました。現在東組は二〇軒です。当初から御祈祷は南組の時と同じ仏式で、ちょうど組のすぐ隣にある吉祥寺の通夜堂で行っています。事前にお願ひしておいた御札を当日住職さんから頂きます。各戸用と組の東西南

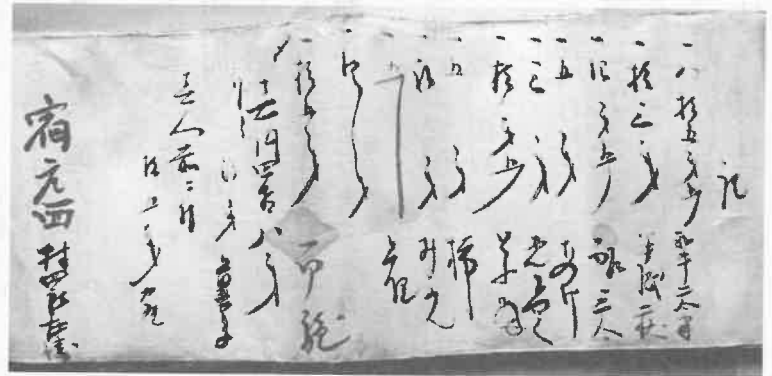


写真16 北組の明治40年支出明細
(明治40年起「祈祷連名簿」から)

北の境に立てるもの二種類で、各戸用は世帯主の名入りです（写真17参照）。その後話し合いをすませた後で懇親に移ります。仕出し弁当を用意します。新しく組入りした家からは清酒を頂くので、その年はそれを使います。出席者は男性が多いですが、最近できた組なので農家が少なく、勤め人も勤務態様の多様化など各家の事情があり、女性の出席者も何人もいます。」



写真17 吉祥寺の御札

南組の様子を弓達武明さん（昭和一二年生まれ）に聞いた。

「昔から正月三日でした。御祈祷は以前は仏式で、事前にお願いしておいた吉祥寺の御札を組長がいただき各戸に渡していました。組で話し合って、平成九（一九九七）年からは神式に変更し、二名神社の御札（写真18参照）を受けるようになりました。」

賄いは平成四（一九九二）年から仕出し弁当になっていますが、平成一八（二〇〇六）年までは宿元の家でしていました。しかし、戸数が増えて住宅事情も変わったため、翌一九（二〇〇七）年からは吉祥寺の通夜堂を使うようになりました。通夜堂に神式の祭壇を設けて神職さんからお祓いを受けて御札をいただいています。

この年から宿元の当番は廃止して組長が準備等の世話をしています。

昔、昭和二四（一九四九）年ごろは清酒は手に入らず、いわゆるどぶろくでした。その頃は一三軒だったのですが、昼前

に始まって午後の四時ごろまで花札をしたり談笑したりして懇親が続きました。酒は一升びんが三本は空きました。



写真18 二名神社の御札

以前は葬儀があれば賄いは組内が寄って助け合っていたし、ほかにも組の寄り合いはありましたから、食器は組用のものをそろえて使っていました。

最近では農家が減って勤め人が増え、また高齢化やその他諸事情で組の役をお願いできない家も出るようになりました。社会の問題が身近に迫っているようで、他人事ではないと痛感しています。」

北組の西村経高さん（昭和三年生まれ）に聞いた。

「組の『祈祷連名簿』によると明治四〇（一九〇七）年の北組の出席者は一人となっています。昭和四〇（一九六五）年までは支出の最後に『布施』とあって（写真16参照）仏式でしたが、昭和四一（一九六六）年からは『御札』とありますから、この年から神式に変えたようです。

正月行事なので昔は神事から賄いまで男性だけがしていました。料理で覚えているのは、皮鯨、湯豆腐、大根や人参のなます（酢物）です。

子ども心にこの日は白いご飯が食べられてうれしかったのを覚えています。その頃は丸麦（脱穀したままで押しつぶしていない麦）押しした麦より食べにくい）も食べていたし、魚は自分たちで捕った川魚を食べていたので、おたさんがごろ櫃を頭に載せて魚を売りに来ても買うことはない毎日でした。そんなく

してしたから、御祈祷の料理はごちそうでした。

北組と西組とで続けている八月二四日のお地藏さんのお念仏も、以前は当番が寄ってそうめんなどを作っていました。缶ジュースになり、正月の御祈祷は昭和六一（一九八六）年から仕出し弁当になりました。皆が裕福になりました。」

沖台中組の平成二八（二〇一六）年の宿元である巻田清正さん（昭和一六年生まれ）に、明治三八（一九〇五）年からの沖台の「御祈祷宿覚帳」（写真19参照）を中心に話を聞いた。

「昭和四七（一九七二）年の御祈祷の出席者は二七名でした。そ

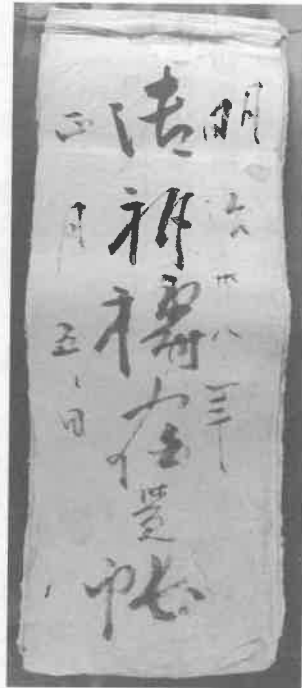


写真19 沖台中組の明治38年起「御祈祷宿覚帳」

の際沖台上組と沖台下組に分かれる相談をして、翌年は一四名になりました（写真12参照）。後に沖台上組は沖台上組と沖台中組に分かれましたが、明治時代からの沖台地区の「宿覚帳」は沖台中組が使っています。ちなみに今年の参加者は一九名でした。出席者数と戸数は同じではないこともあります。体調がすぐれないとか不幸ごととかで欠席する家もあるからです。

明治四一（一九〇八）年正月の御祈祷について見てみました。出席者は一〇名です。費用は一人あたり一七錢四厘でした。お初穂料は一〇錢で、ほかの買い物は、酒二升一合、砂糖、こんにゃく、酢三合、揚げ、みかん、とうふ、鯨、半紙一状（二〇枚）ということです。その後、いわしやトリが載っていて、牛肉を昭和三（一九一八）年に初めて使っています。五百匁（約千九百グラム）

で一円五〇錢です。終戦の昭和二〇（一九四五）年一月まで牛肉を買っており、二一年は購入品目別の記載はありません。物資不足の世相を反映してでしょうか。二二年は鶏二羽とあり、翌二三年から牛肉が再登場します。今は仕出し弁当を利用しています。

宿元は組長とは別の順でまわります。祭壇のお供えは、清酒、米、乾物のするめやこんぶなどと葉のついた大根や人参を使っています。ほかに塩水と南天の葉、注連縄を用意します。以前は鏡餅も供えていました。

父に代わって自分が出席するようになって、今回「宿覚帳」（写真19参照）を改めて見ました。支出明細や出席者の名を綴った半紙が毎年綴じられています。御祈祷は、昔から組内の安全と豊作を願って続けてきた行事であり、時代を映しながら受け継いできた、地域をつなぐ大切な行事であることがよく分かりました。」

（三）御祈祷のこれから

古く農耕主体の集落では共同で水路を保全し田畑を守り、互いにくらしを支え合ってきた。近隣とのつながりは必須のものであった。組内を守る御祈祷に出席するのは戸主であるが、質素な暮らしの中では、その日は子どもも含めた家族が穏やかに過ごす年初めの一日となっていたのだろうか。

時代が変わり、出作でも非農家の戸数が増えて家族構成も変化し、御祈祷の受け方、懇親の持ち方も少しずつ変化してきた。今回聞き取りをするうち、その変化は住民に受け継ぐ意思があつてこそだという思いを強くした。

吉祥寺と二名神社を通した地域共同体を保持する行事として、今後も出作の御祈祷は継承されていくと思う。

四 神 崎

(一) 地区の概況

神崎は旧北伊豫村の中心に位置し、小・中学校、役場(現東公民館)、農協等、主要な公共施設が集中した村の中枢をなす地区である。また、古くより延喜式内大社伊豫神社と、その別当寺である晴光院は、古い歴史と格式を有している。

世帯数は、四五四戸(内農家は七四)、人口一四九五人、組数二二である。

かつて神崎は、井手上、井手下、大上、向井、北ノ丁、新屋敷、大井手、横田丁の八組であったが、現在、大井手組を除き、井手上は六組、井手下は三組、大上は四組、向井は二組、北ノ丁は二組、新屋敷は二組、横田丁は二組とそれぞれ分割されている。

(二) 御祈禱について

御祈禱は組単位で実施され「組祈禱」とも呼ばれている。毎年年の初めに組中の幸せのため組中安全、家内安全、五穀豊穰を願って御祈禱を執り行い、併せて年内の行事の打ち合わせと親睦を図ってきた。

御祈禱は晴光院の住職を迎え仏式で行う。終了後、引き続き組総会として一年間の諸行事報告をはじめ、次の組長、年間行事予定、次の御祈



写真20 晴光院住職による集会所での御祈禱(大上上組)

禱の確認、その他年頭の協議を行い、続いて親睦会を持っている。現在実施されている組は二三組中一三組、その中でも六組は二組ずつ合同で行うため、現在神崎の御祈禱は年一〇回行われている。

1 会場

御祈禱そのものの内容は、晴光院に備え付けの「般若箱」(經櫃)に納められた一式の物を使って準備し、住職の読経で行うもので各組ほとんど同じであるが、会場については組の状況で変化している。会場については三つの形がある。

(1) 順番で組員宅を宿とし実施日も固定する組 二組

北の下組 一月一七日、大井手組 一月一八日

(2) 神崎集会所で行う組 一〇組

ア 合同で行う組 六組

南組と南什人組、向井南組と向井北組、

井手下の上組と井手下の下組

イ 組単独で行う組 四組

新屋敷南組、新屋敷北組、北ノ丁組、大上上組

(3) 晴光院で行う組 一組 大上下組

御祈禱は少々狭くても行えるが、親睦会は広い場所を要するため、個人宅で宿をすると無理な場合があり、集会所や晴光院を利用するようになった。この傾向は平成一四年頃から見られる。やがて御祈禱、親睦会とも集会所等で行うようになった。

記録をたどれば、御祈禱は組内の宿元(個人宅)で行い、総会と親睦会を集会所に移動して行うとか、原形を守ろうとする努力の跡が見られる。

2 実施日

会場の変化とともに実施日も変化してきたが、北の下組は一月一七日、大井手組は一月一八日と昔から固定している。他

の組は一月の土曜日か日曜日、成人の日の休日に行く。

実施日は、従来組ごとに決められた日があったが、勤め人も増え住民の要望により休日へと変化した。成人の日は、北ノ丁組、他の一〇組は土・日曜日を譲り合って行っている。実施する時間は合同で実施する井手下組が午後で、他はすべて午前中である。

3 親睦会の料理

親睦会の料理は、当初炊き出しをして賄^{まか}っていたが、昭和五〇

(一九七五)年頃より次第に仕出し料理になり、今では全組仕出しである。仕出しへの転換が遅かった組は、大井手組が昭和六一(一九八六)年から、北の下組が六四年からである。

さらに最近になって仕出しもやめ、茶菓子で済ませる組も始めている。御祈祷の一連の行事が早く終わるようになり簡素化されてきた。これは住民の意識の変化であると思われる。

(三) 御祈祷の起源と準備

起源は明らかではないが、晴光院七世道林智観大和尚のとき、文政年間(一八二〇年頃)に、「大般若波羅蜜多經」六百巻を購入したとの記録があり、この頃が神崎、鶴吉での御祈祷の始まりではなからうか。

御祈祷の肝要は、お祈りと御札である。「奉轉讀大般若經諸願成就祈攸」と記した「御札」を自分たちで刷り、住職とともに祈りを込め各戸に持ち帰りお祀りをする。そのために祭壇を



写真21 個人宅での御祈祷(大井手組)

設ける。祭壇は中心に拝む対象の掛軸を奉り、お供えを調える。



写真22 各戸への御札(左)と関札



写真23 「大般若理趣分經」を住民の肩に置き諸願成就を祈念する住職(大上上組)

1 組内の準備

○当日 約一時間前に晴光院より御祈祷の一式を納めた般若箱を会場に運ぶ

○組で準備するもの 生米四合から一升 米五合炊いて升到盛る 小皿の塩 皿に塩水を入れ南天の葉を添える 竹四本(関札を立てるため)など

○御札作りと祭壇 御札用版木を使って刷り御札とする 正面奥に掛軸を掛ける 正面の上に紙垂付きの注連縄を張るなど

2 御祈祷

晴光院住職を中心に参加者一同祭壇に向かい住職の読経。お経は「大般若經第十會般若理趣分經」、「大般若波羅蜜多經」十巻を転読する。読経のあと、経本を一人一人の肩に置き、肩たたきで諸願成就を祈願する。最後に住職の説教を頂く。所要時間約三〇分、御祈祷終了後、各戸に御札と升到盛ったご飯を分けて渡す。

(四) 氏神講との関連

「氏神講」は、御祈禱と趣旨は同じであるが、神職をお迎えして同じ一月神式で行う。組内に伊豫神社と晴光院がある井手下組では、この二つの行事を歴代行ってきたが、平成一五(二〇〇三)年をもって氏神講は終了し、仏式の御祈禱のみとなった。

池内修さん(大正九年生まれ)によれば、「ずうっと昔、北組や南組が井手上組といわれた頃、井手下組と同じように氏神講(宮祈禱)と御祈禱(寺祈禱)を行っていた。」と言う。

ここで井手下組の「組祈禱」と「氏神講」について、水口裕一さん(昭和二五年生まれ)に、お父さん(水口義一氏)から生前聞いたことを話してもらった。

「組祈禱は、組行事の中でも歴史ある仏式の定例行事の一つで、毎年一月に開催され現在に至っている。

井手下組の現存する引継台帳『組雑支出台帳』によれば、昭和一〇(一九三五)年には既に行われており、組内の行事として位置づけがある。

当時は組内で食材等を購入し、飲食の準備等をしていた模様がかがえる。開催時刻は午後二時、夜七時頃まで行われ親睦を図っていた。

組祈禱の協議事項は、区長後任の件、冠婚葬祭等、組内の取決め事項などが記されている。宿は輪番で、組長宅で延々と開催されていた組祈禱も、生活様式の変化に伴い平成一五



写真24 「組雑支出台帳」
(井手下組)

(二〇〇三)年からは集会所で行われるようになった。

氏神講については、組祈禱と同じく歴史ある行事の一つで、一月下旬の日曜日に開催されていた。開催場所は組長宅である。伊豫神社の神職をお迎えして組内全員が、新年の

家内安全、五穀豊穰を祈願し懇親を図っていた。

しかし、組内に不幸事があると喪に服しているため、この氏神講に出席できない家もあることから、平成一五年一月の氏神講を最後に開催されなくなった。

さらに水口裕一さんは「祈禱と聞くと宗教行事を直ぐに思い浮かべるが、過去も現在も、地域のコミュニティ形成を構築する一つの行事が御祈禱と称されている感があり、身近な生活習慣として催されている。」と言う。

(五) 変容する御祈禱

御祈禱は、住民の生活様式や意識の変化に順応し今後一層変容すると思われる。現に転入者が、御祈禱を仏式の宗教行事と捉え不参加になっている組もあると耳にする。

近隣関係が希薄化する今こそ、地域のコミュニティづくりの場として大切に継承していきたいものである。



写真25 昭和10年度「氏神講」の経費
(井手下組)

五 鶴 吉

(一) 地区の概況

地区の中央部を南東から西に長尾谷川が流れ、川の北側を本村地区三組(上・中・下)、南側を安井地区三組(東・中・西)、地区東側を三軒屋、西側を賀佐と呼ぶ。地区東側の神崎地区に晴光院と伊豫神社があり地区の多くの人が檀家、氏子となっている。平成二十七年四月の世帯数二三八戸、人口八七一人、農家数八五、組数八である。

(二) 御祈祷の今昔

今から一五〇数年前まで本村の三組と安井の三組、賀佐は正月祈祷と夏祈祷を行っていた。現在、両方の実施は本村上組のみ。御祈祷を実施しない組は三軒屋一組、ほか六組は正月祈祷のみである。多くの組が年一回の御祈祷に変わったのは、当番や各戸の負担軽減のためといわれている。

また本村地区では子どもたちによる虫祈祷(夏祈祷)が行われている。

(三) 御祈祷時の行事

新年の御祈祷は正月明けの休日に行われる。これは一月末の大字総会までに、「組会」を開き各組の役員を選出するためである。その後、御祈祷、懇親会を行う。

表2 鶴吉御祈祷の現状

組名	御祈祷		御祈祷方式		御祈祷場所		懇親会		備考
	正月	夏	神式	仏式	宿元	公民館	宿元	公民館	
三軒屋	—	—	—	—	—	—	—	○	御祈祷は無い、新年会のみ
本村	上組	○	○	—	○	—	○	—	
	中組	○	—	○	○	—	○	—	
	下組	○	—	○	○	△	○	△	△公民館使用もあり
	—	虫祈祷	—	○	お薬師堂	—	—	—	小学生による御祈祷
安井	東組	○	—	○	○	—	—	○	
	中組	○	—	○	—	○	—	○	
	西組	○	—	○	—	○	—	○	
賀佐	○	—	○	—	○	—	○	—	

(注) 本村下組は昭和40年前後に下組と中組に分割

1 組会(組総会)

多くの組が正月祈祷当日に組会を実施している。組内の世帯が集まるのは、この時のみであり、組会では前年度の行事、組会計報告と新年度の組長、協議員、その他の役員選出と組の課題協議を行う。その後、年間(半年)の必要な組費と懇親会費用の集金を行う。

2 御祈祷

御祈祷は表2のように神式と仏式があり、神式は本村上、安井東と賀佐の三組、その他の四組は仏式で行っている。前年家族に不幸のあった方は、神式の御祈祷は欠席。仏式の場合、出欠は本人の判断に委ねている。

(1) 神式の御祈祷

伊豫神社神職(現在は伊豫稻荷神社神職星野氏の兼任)の御祈祷は、宿元では神棚に紙垂を付けた注連縄を掛ける。そして神職が来られた時は、当番と神職と一緒に祭壇を組立て、棚に鮮魚(鯛)と収穫したお米と野菜(人参・キャベツ等)、果物(みかん・りんご等)、お神酒、塩水の皿に南天の小枝、当日炊いたご飯をお供えする。そして神職が持参した氏神さまの御札「伊豫神社歳旦祭祈禱御策」、六枚組の「門神・廁神等の齋御守」の御札と「藪神様の御幣」(竹に挟んだ紙垂)、櫛を中央に祀り、五穀豊穰、無病息災、家内安全、組中安全の御祈祷を受ける。



写真26 伊豫神社神職による御祈祷(賀佐)



写真27 伊豫神社歳旦祭の御札(右)と六枚組の齋御守

神事のあと参加者全員のお祓いを行い、宿元と組代表が玉串拝礼をする。その後、神職のお話で終了する。御札は参加者に配られ、各家の神棚と各所(門前・厠等)にお祀りし、藪神様の御幣は屋敷神の在る家のみに配り、お祀りをする。

(2) 仏式の御祈禱

晴光院住職の御祈禱は、当日当番が晴光院に御祈禱準備品のお経、掛け軸、札の版木等を取りに行き、当番宿にて版木に墨を付け、和紙(半紙)を被せて「奉轉讀大般若經諸願成就祈攸」の御札を刷る。祭壇には紙垂を付けた注連縄と掛け軸を掛け、刷った御札を祀り、周りにお米、野菜、お酒をお供えし、ローソクを立て住職の御祈禱を受ける。

御祈禱は大般若經本の読経、

そのあと住職が参加者一人一人に「大般若理趣分經」を肩に置き肩たたきを行い、諸願成就

の祈念をする。最後に住職の講話を聞き終了である。

小御札は御祈禱後、各参加者に配り各戸にてお祀りする。大御札は宿元に祀り、また四枚の大御札は竹に挟み「境札」として、組の東西南北の境界に立てて祀る。

(四) 各組の御祈禱

1 三軒屋(世帯数三二戸)

昭和三〇年前後は一〇世帯程度であったが、最近是新宅と転入世帯により大幅増加した。



写真28 晴光院の御札(左)と住職による御祈禱(本村中組)

明治時代は、柏原、済川の両家が祭主として、組内数軒の人と、組内にあった小さな竈神社で無病息災、五穀豊穡の御祈禱を行っていた。この神社は「竈神社 通称へっついさん」と呼ばれていた(詳細は『北伊予の伝承Ⅱ』「竈神社 通称へっついさん」参照)。

御祈禱について西影順一さん(昭和二年生まれ)に聞いた。

「いつからか時期は不明だが、三軒屋は組の御祈禱行事は行っていない。その代わりに、毎年元旦に組新年会を行う。全世帯が集まる行事はこの時のみで、前年の行事、会計報告、新年度の組長、協議員等の役員選出、組問題の協議等を行った後、新年会に移り、簡素な料理と酒にて公民館で組内の懇親を図っている。」

2 本村上組(世帯数三三戸)

御祈禱について白石勝美さん(昭和九年生まれ)に聞いた。

「昭和六〇年頃は一七〜一八世帯程度であった。増加世帯は新宅である。現在、正月と夏祈禱を伊豫神社の神職によって行っている。鶴吉で年二回の御祈禱は上組だけである、組内全戸が揃うのは御祈禱時のみで、組内の付き合いや、繋がりをするためである。」

昔、正月祈禱は一月八日、夏祈禱は田休みと決まっていたが、時代の変化に伴い勤め人が増え、決まった日取りでは難しく、現在、冬は年明けの休日、夏は六月第三日曜日に行う。現在も宿元は当番の持ち回りで個人の家で行っている。懇親会料理は仕出し料



写真29 懇親会(本村中組)

理である。昭和六〇年頃までは、組保有の食器を使用していたが、仕出し料理に変わり、食器類は公民館に寄付した。」

3 安井東組(世帯数三三戸)

昭和四五年頃の高成長時期は一九世帯であつたが、新宅の大幅増加と転入世帯により現在の世帯数になった。

明治三三(一九〇〇)年(一一五年前)の「共有金台帳」を見ると御祈禱はすでに行われ、組の重要な会計と行事(御祈禱等)が記載され現在も継承されている。「台帳」は、組会、御祈禱の宿元、当番名、参加者数と組会計、御布施費、懇親会料理費、秋祭り費用、組役員名が記されている。

明治三三年の台帳を見ると「明治三拾三年度ノ總會之決議ニ依リ大字共有金ヲ組々二分借但壹戸ニ付五円宛ノ割リ当 当東組拾六戸真人名左ノ如シ 大政新三郎 大政赤一郎 柳原弥市 柳原忠次 大政興太郎……」と組会計内容や参加者氏名等が記入されている。御祈禱内容、懇親会料理等は記載無く不明である。御祈禱の記載が始まった時期は大正九(一九二〇)年の夏祈禱からである。この時期から御布施費用(壹円)と賄い料理の買出し品(ソウメン、シヨウウ、イリコ、酒等)、金額が記載されている。御祈禱について大政秀郷さん(昭和一九年生まれ)に聞いた。

「平成一〇年までは、御祈禱は正月祈禱と夏祈禱を行つてい



写真30 明治33年「共有金台帳」と台帳の一部(東組)

た。昭和三五年前後までの正月祈禱は神職が各戸を回っていた。その後、当番宅での御祈禱になった。夏祈禱は虫祈禱とも呼ばれ、田植え後の田休みの日(七月初旬)に晴光院の住職によって行われていたが、平成一一年から正月祈禱のみになった。鶴吉の多くの組も、この前後に年一回の御祈禱になった。その理由は当番や組内の負担軽減のためと言われている。」

御祈禱・懇親会宿については、昔から現在まで当番宅での持ち回り、新築した場合は優先して宿元としている。懇親会も当番宅であつたが、最近は世帯数が多く宿元での実施が難しく、公民館を使用する機会が多い。

懇親会の賄い料理については、昔買出しは当番男性が郡中(現伊予市)へ買い出しに行き、当番の奥さんが作っていた。昭和五〇年中頃までは正月は昼夜二回の懇親会があり、昼間は簡単な料理(豆腐・酢もの)と二升の酒のみであった。昼間から多くの酒を飲むと、酔っ払うとのことで少々にしていた。夜は多くの料理と酒にて大いに組内の懇親を図っていた。その後、懇親会は御祈禱後の一回のみとなった。これは兼業農家が増え、朝から晩までの行事が難しくなったためである。」

昭和六二年正月祈禱からは仕出し料理に変わった。一戸当りの料理費用は、昭和一八年七六銭、昭和四二年二二〇円、昭和六二年千五百円、現在は二千五百〜三千円である。



写真31 大正9年夏祈禱(東組)

六 横 田

(一) 地区の概況

横田は、松前町の最も南に位置しており、伊予市上三谷、下三谷地区と隣接している。地区の中を東西に流れる大谷川を中心に発展した農業集落である。

人口は現在、二五四人、戸数八九戸（北組三八、南組二一、村組三〇）、農家は四六戸で北伊予地区でも最小の集落である。横田は昔、沖代と本村に分かれていた。沖代はさらに大谷川を挟んで北側は北組、南側は南組と呼ばれていた。現在は、北組、南組、村組と呼ばれている。

(二) 御祈禱について

横田の御祈禱の日は、沖代が一月二三日と二四日の午前中、本村が一日の午後から一五日と決めていたようである（『北伊予の伝承区』『横田地区御祈禱』昭和七年生まれの金子忠行さんによる）。

沖代は、北組と南組が交互に宿を決めて実施していたが、北組の人数が増えたこと、唐櫃^{からびつ}を担いでまわる範囲が広いこと、最近では巡行しても留守宅が多いことなどから平成一七年からそれぞれ組単独で実施することとなった。

現在は南組が一月の第二日曜日、村組が一月の第三日曜日、北組が隔年で一月一三日に近い日曜日または休日と決めている。

実施日を日曜日や休日としたのは、農業中心の横田地区も時代とともに専業農家がだんだん少なくなり兼業農家や非農家が増えたため行事に参加しやすい日を選定したからである。

1 起源

横田の御祈禱の始まりは、北組は明治八（一八七五）年正月



写真33 「祈禱入用帳」(北組)

開始と考えられる。

「山伏により行われていた御祈禱が、明治五（一八七二）年の修験禁止令のあと各地に引き継がれたのではないだろうか。」（愛媛県歴史文化博物館学芸員大本氏に聞く）。

明治八（一八七五）年当時の「横田村」は、享保の大飢饉^{ききん}（一七三二～一七三三年、村の六割以上の人が死亡）の影響がまだ残っていたことや度重なる大谷川の氾濫^{はんらん}など地理的悪条件が重なり、疲弊^{ひへい}が甚^{はなは}だしかったことなどから経済状態は悪く、伊予郡二四か村中、下位の部に入る寒村であった。

また、同じ頃横田村村務係に任命された青年（明治一一年横田村戸長に就任）が、村風の刷新、貧困からの脱出の根本対策に着手しようとしていた時期でもある（『松前町誌』『松前地区飢饉の惨状編』『篠崎謙九郎編』より）。

そんな過酷な状況の中だからこそ、正月の月に組内の者が集い、日頃の苦しさを忘れて酒を飲み、語り明かす。そして、日の出に向かって今年一年の「家内安全と五穀豊穡」を祈願する御祈禱の行事が生まれたと考えられる。

一三日からの記録がある（『横田北組祈禱入用帳』昭和一三年生まれの徳本直之さんによる）。南組には明治九（一八七六）年正月一三日からの記録がある（南組「日待入費帳」昭和一五年生まれの町田始さんによる）。

村組は大正三（一九一四）年以降の記録しか残っていない。しかし、北組や南組と同一地区内であることや山伏起源説などから、明治八（一八七五）年頃の

2 御祈祷の準備



写真34 御祈祷風景(村組)

横田の御祈祷は、菩提寺天長寺(禪宗)に住職が在任していた昭和二十九年ごろまでは、二日がかりの行事だったが、晴光院の兼務住職になってからは一日で終わるようになった(横田地区御祈祷より)。

御祈祷の準備は、昔は「宿」と呼ばれる当番(二戸で担当)の家に組内の者が集まり行っていた。

準備には、住職をお迎えして仏事を行う準備と、その後の慰

労会の準備がある。
住職をお迎えする準備として、祭壇に注連縄を飾り付け、版木に墨を塗って短冊に切った半紙に御札を刷り上げていく。村組は御札の外包札も同じように刷り上げ、天長寺の御朱印を押す(御札、外包札の版木の内容については「横田地区御祈祷」を参照)。

祭壇の正面に十六善神の軸を掛け、「大般若理趣分経」、「大般若経」十巻(六百巻の中から、偏らないよう抽出)、作った御札、四方札、塩水、御酒、米、重ね餅、炊きたてのご飯等をお供える。

なお、清められた御札は慰労会のあと各自が持ち帰り、四方札(外包札に包んだ御札を青竹に挟んで縛る)は組内の境界東西南北に立てる。

住職が着座すると参加者一同が正座する。まず灯明を灯して、塩水を付けた南天の葉で祓い清め礼拝読経する。「大般若

経」十巻を一巻ずつ手に取って前後左右に振るようにして転読する。

「大般若経」十巻の転読が終わると、次に「大般若理趣分経」を転読し、そのあと参列者一同の家内安全、無病息災を願って一人一人の肩に「大般若理趣分経」を頂かせてくださる。

3 巡行

御祈祷が終わると経本の入った唐櫃を担ぎ、鉦をならしながら、お供えしたご飯のお重や御札をもって、数人がかりで組内各戸を回っていく。



写真35 巡行(北組)



写真36 唐櫃をくぐる(村組)

家に着くと唐櫃を持ち上げ、家の人は一人一人その下を潜り(往復)礼拝をする。持ってきたご飯を小分けして回る。

4 慰労会

仏事の御祈祷行事が終わると、組内の新年会を兼ねた慰労会が行われる。

慰労会は、組中の会を兼ねる北組、南組はその年の組長が

行事報告、会計報告、要望事項などを取り纏めたあと慰労会となる。御祈禱単独の行事である村組は、その年の当番が当日の会計報告を行い慰労会へと移る。

慰労会の準備については、北組は「横田北組祈禱入用帳」、南組は「日待入費帳」、村組は「組祈禱帳」を繰ってみるとその時々、賄いの方や料理の移り変わりなどが推測される。

これらの帳簿は、呼び名は違っているが御祈禱行事の会計に関する帳簿であり、以下「入用帳」という。

「入用帳」は、その年の御祈禱に係わる買い入れ物品の数量、値段、布施の額や寄付物品とその数量、寄付者の名前などを記載し、その年の御祈禱に参加する一戸当たりの負担額を算出する会計帳簿のことで、残金や欠損時の措置なども記入するなど、現在の金銭出納帳に代わるまで、連綿と記載されている。

この帳簿は御札の紙(和紙)を使い墨で記載されており裏に御札文字が浮かんでいる箇所もある。

記載の内容は組によって多少違いがある。向こう何か年かの御祈禱当番、その年の米の値段、年始めの物価(米・麦・大豆・肥料など)、中には牛一頭の値段や御祈禱での貸借を記載している組もみられる。

戦争中はだんだんと参加者が減り通常年の六割程度、買物点数も少なく、平常年の四分の一以下という厳しい状況であった。その当時の買物で目を引くのは、「御酒」である。全体の購入額の四割近くを占める一本の御酒。祭壇にお供えたその御酒を酌み交わしながら、家内安全、組内の安全を祈ったのではないかと思われる(村組「入用帳」より)。

また、戦後の物価の変動の激しさ(一戸あたりの負担額が昭和二十一年六〇銭、二十二年八円一〇銭、二十三年四〇円)なども分かる(村組「入用帳」より)。

時代の経過とともに、専業農家がだんだん少なくなり兼業農家や非農家が増え、行事に係わる時間の確保が困難となつて慰労会の賄いの方や料理の移り変わりなどが推測される。

男性を中心にして買い入れから料理までをやっていた時代、宿の人や組長を中心に料理を作った時代、仕出し料理の時代(昭和六一年から平成の始め)へと移っていった。

5 宿の変遷等

「宿」については、昔は「入用帳」に向こう何年かの当番の順番(二戸組)を指定し記載していたようである。

その後は二戸組の輪番制とし、当番の内どちらかの家をその年の「宿」とするなど、個人の家を「宿」としていた。

しかし、最近では、宿の準備に時間が掛かることや参加戸数が増えたこと、住宅事情や食器類など、個人の家を多数の人が利用することが難しくなり、各組とも個人の家から、公共の場所(横田老人憩いの家、北組は集会所)へと平成八年から平成十三年の間に変わった。

また、御祈禱に係わる時間も二日から一日へ、現在は当日午後一時集合の半日となった。

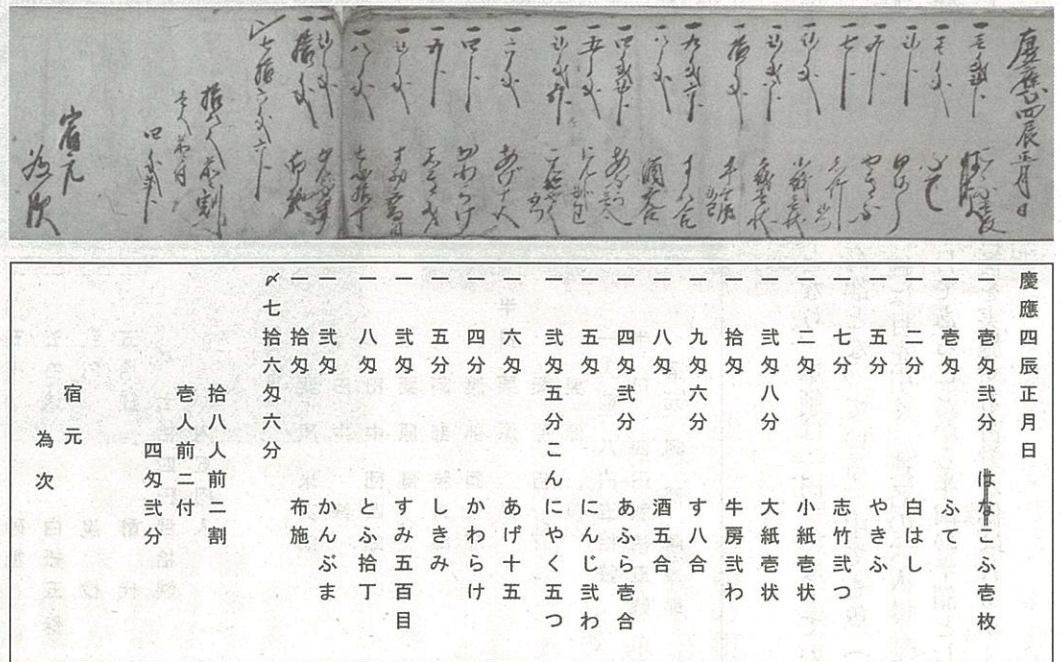
(三) これからの横田の御祈禱

横田の現況は、六五歳以上の人口が八〇人(男三八人、女四二人)で全体の三一・五割となっている。しかも、高齢の一人暮らしの世帯数が戸数の約一割近く見られる。

若者は少なく過疎化、高齢化が進む中で、御祈禱のあり方もその時代の生活様式や状況によって変化していくものと考えられる。

しかし、組中の家内安全と五穀豊穡を祈念する御祈禱の行事は、いろいろな状況の中でも脈々と続けられてきた。今後この伝統は継承されていくものと思われる。

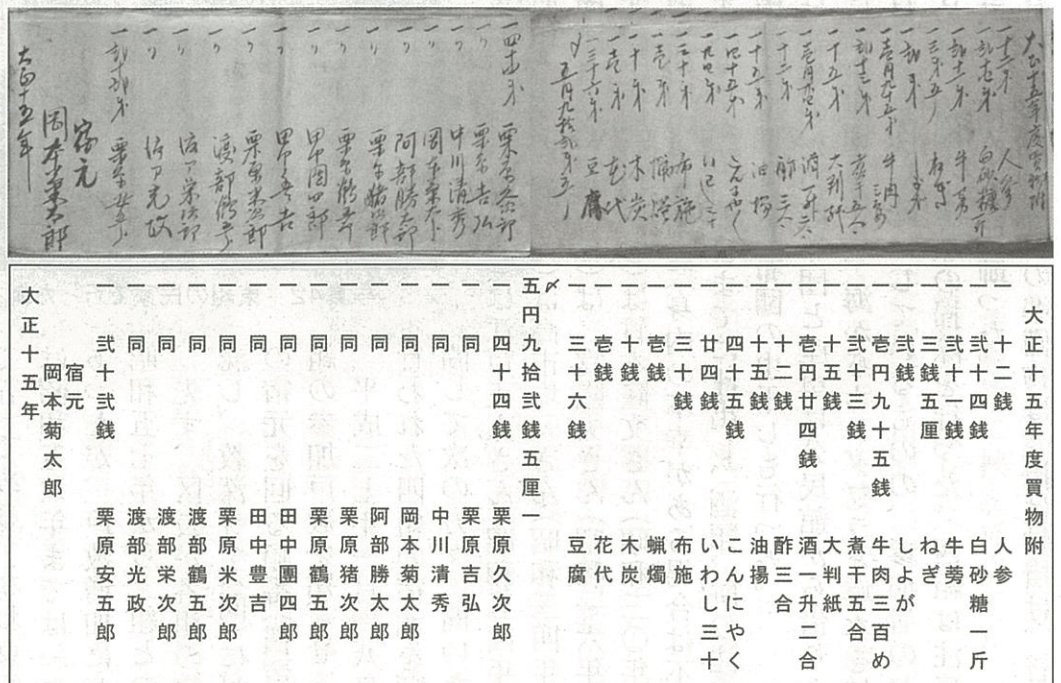
祈禱の準備品や賄の食材などの入用品が記され、一〇年前の安政四年と比べ金額や準備品も多くなっている。お布施は十匁と、ほぼ倍額を支払っている。諸費用は組員一八人で割り勘にして一人四匁二分出している。



慶應四辰正月日	
壹匁貳分	俵本こふ壹枚
壹匁	ふて
二分	白はし
五分	やきふ
七分	志竹貳つ
二匁	小紙壹状
貳匁八分	大紙壹状
拾匁	牛房貳わ
九匁六分	す八合
八匁	酒五合
四匁貳分	あふら壹合
五匁	にんじ貳わ
貳匁五分	こんにやく五つ
六匁	あげ十五
四分	かわらけ
五分	しきみ
貳匁	すみ五百目
八匁	とふ拾丁
貳匁	かんぶま
拾匁	布施
七拾六匁六分	
拾八人前二割	
壹人前二付	
四匁貳分	
宿元	
為次	

写真39 慶応4 (1868) 年の記録

大正一五年になると、名称も「買物附」となり、金額の単位も「匁」から「銭」になり、江戸末期とは隔世の感がある。品目で珍しいのは牛肉や白砂糖や牛蒡、布施として三〇銭支払っている。費用は組内の割り勘で一三人は四四銭、一人は半額の二二銭出している。



大正十五年買物附	
大正十五年	白砂糖 一斤
二二銭	牛蒡 一斤
二二銭	牛肉 五百
二二銭	牛き 五百
二二銭	煮干 五百
二二銭	大判 紙五合
二二銭	酒 三升二合
二二銭	油 三升二合
二二銭	揚げ 三升二合
二二銭	いん 三升二合
二二銭	布 三升二合
二二銭	蠟燭 三升二合
二二銭	木炭 三升二合
二二銭	豆腐 三升二合
二二銭	豆 三升二合
二二銭	栗原久次郎
二二銭	栗原清秀
二二銭	中川清秀
二二銭	岡本清太
二二銭	阿部勝太郎
二二銭	栗原猪次郎
二二銭	栗原鶴五郎
二二銭	田中豊吉
二二銭	田中豊吉
二二銭	栗原米次郎
二二銭	渡部鶴五郎
二二銭	渡部栄次郎
二二銭	渡部光政
二二銭	栗原安五郎
二二銭	宿元
二二銭	岡本菊太郎
二二銭	大正十五年

写真40 大正15 (1926) 年の記録

昭和二十一年 買物	
八円貳拾銭	酒 壹升
壹円	布 施
壹円五拾銭	豆腐 拵
七円五拾銭	イリコ 五十匁
四拾八円	魚 六百目
五拾銭	砂糖
五拾銭	白紙 五枚
貳拾銭	炭 伐
五拾銭	酢 代
七拾四円貳拾銭	内 五円入
連名	
栗原 米次郎	
田中 修四郎	
栗原 健介	
阿部 勝太郎	
渡部 西五郎	
栗原 吉弘	
栗原 茂	
一人前 八円五拾銭	
半口 四円貳拾五銭	
宿元 阿部 勝太郎	

写真41 昭和21(1945)年の記録

名称は現在と同じ「買物」となり、単価は「円」になっている。
終戦直後の物価高騰期で高額となっていた。中でも魚(六〇〇目)八円、酒(一升)八円二〇銭は目を引く。連名の六人は一人前として八円五〇銭を出し、三人は半日であることから半口の半額としている。物不足と物価高騰期の御祈禱を実施する苦勞が偲ばれる。



写真43 玄関に飾った西組の注連縄



写真44 不動明王(左)と般若守護十六善神

がる。ほろ酔い加減になった後、寺が用意してくれた厄払いの御札と餅、米を持ち帰る。
東組は朝から集合し、仕出しを囲みお酒など少し飲んだ後に読経と説教を聞く。後は他の組と同じである。

線香、シキミ、おりん、座卓、座布団、おもてなしのお茶、茶菓子である。
参加者への準備物は、事前に準備したものと、座卓、食器類、お茶、茶菓子、餅、米などである。
住職は、最初の組が寺に迎えに行き、読経と説教の後、次の組の関係者が迎え、最後の組が接待した後、見送りをするのが慣例であった。最近住職自身が掛軸二本(般若守護十六善神・不動明王)を持参し、各組を回りそのまゝ帰っている。
住職の読経と説教の後、参加者は仕出しを囲みお酒などを飲みながら、最近の出来事や大字の役員候補などの話題で盛り上がる。



写真42 東組の民家で行った御祈禱

(三) 御祈禱の現状

大溝の御祈禱は、原田南組を除く四組で行われている。本村では、南組(戸数は二一)と北組(戸数は二〇)があり、原田では東組(戸数は三一)と西組(戸数は二五)である。なお東組、西組は昭和五六年までは一つの組であったが、戸数増加にともない昭和五七年から二組となった。
まず、区長が各組の宿元を確認し、教深寺(大間)に対して組の宿元を回る順番(慣習)及び各組の参加戸数を知らせる。
平成二七年一月一八日(日)に行われた四組の宿元を順番に訪問して次の方々に聞いた。
原田東組(参加戸数二四)は江戸正人さん(昭和五四年生まれ)原田西組(参加戸数一九)は高市均一さん(昭和三四年生まれ)本村南組(参加戸数一二)は二宮隆夫さん(昭和一六年生まれ)本村北組(参加戸数一〇)は竹本隆文さん(昭和三〇年生まれ)「事前に組内の参加確認(身内の不幸がある場合は不参加)を行い、平成九年から、前日までに仕出し、酒類、餅の注文を行った。日頃使っていない座布団の虫干しも行った。
東組は新築のため座布団と座卓は公民館から借りた。西組は前日には注連縄を作り、海からホンダワラと塩水を持ち帰った。当日は、日頃掃除はしているものの、参加者のおもてなしのため庭、玄関、座敷の掃除を行った。西組は注連縄にホンダワラを付けて玄関に飾った。
住職が行う読経のための準備物は、掛け軸掛け、ロウソク、



写真45 家族で楽しんだ原田南組の新年会

「参加者は毎年四〇人ほどである。昭和六二年から同じ日に公民館で新年会を行っている。内容は朝から当番の家庭の女性が豚汁を作ったりおやつや盛り付けやお酒を沸かしたりしておもてなしをしていく。
仕出し、豚汁を食べながら大人はお酒、子どもはジュース等飲みながら最近の出来事や役員候補、子育てや家族関係、友だちとの遊びなどについて語り、カラオケやビンゴゲーム(景品は各家庭の余剰用品など)を楽しみ、最後は全員で片付けを行い家路につく。」

4 原田南組新年会の現状

原田南組(戸数は二〇、参加戸数一九)は、川辺輝雄さん(昭和二二年生まれ)に聞いた。
「参加者は毎年四〇人ほどである。昭和六二年から同じ日に公民館で新年会を行っている。内容は朝から当番の家庭の女

後片付けを家族で行うとともに、組の東西の家近くの川沿いに、組の厄払いの立札二本を竹に挟んで立てた。その時、組内の一年間の家内安全と豊作を祈願した。
御祈禱行事は、最後に『祈禱諸人用記』に買物の明細や参加者、さらに宿元を記載して次の宿元に手渡しすべて終了した。」

八 東古泉

(一) 地区の概況

北伊予地区の最西部に位置し、松前地区・岡田地区とも接する地域である。記録によれば、元文三(一七三八年)、古泉村が分かれて、東古泉村、西古泉村となった。東古泉村は明和一〇(一七六〇)年には五七戸、明治一〇(一八七七)年には七三戸であった。その内、金蓮寺(西古泉)の檀家は三七戸、大智院(筒井)の檀家は一五戸であった。

平成二七年四月現在、東古泉の戸数は一七九とアパート二棟一六世帯となっている。人口は五六六人で、六〇歳以上の割合は約四〇割となっている。組数は一〇で農家は四〇戸である。

(二) 御祈祷の現状

御祈祷は各組毎に行い、日時は一月の第三日曜日に東古泉の総会があり、その日に合わせて各宿元にてするように地区で決めている。宿元は各組ともに順番制であるが、前年に新築した家、または新しく転入者の家があればその年の宿元となる。

平成二七年には一〇組の内、上南組(一七戸)、庚申組(二五戸)、西中組(一八戸)、五反地組(一六戸)、四反地組(一八戸)、北組(一四戸)南組(二七戸)の七組が御祈祷を実施し、東古泉全世帯数一七九戸の内、一二五戸である。

東組(二五戸)は一〇年くらい前にやめて、西組(一八戸)、上北組(一一戸)も数年前にやめている。これは、組内の相談事の減少、具体的には、三〇年前頃はほとんどの家が農家で共同で持っている粃すり機の管理方法、水田の水引当番、栽培品種の情報交換等を行っていたが、農家が減少し共同の粃

すり機もカントリイに変わり、農業などに関する相談事がなくなること、また宿元に組内全員の集まる広さの座敷がない、組内の住人に転入者等が多く、古いしきたりになじまない等、それぞれの事情によるものである。

(三) 御祈祷の内容

宿元は事前に神棚を準備する。御祈祷の三日くらい前に松前の浜に行つてホンダワラ(海藻)を採つてきて、紙垂とともに注連縄につける。

現在では玄関に海藻を付けた注連縄を張る宿元は少なく、祭壇に海藻を付けた注連縄を張つて、鏡餅、洗米、御神酒、しきみ、小皿に海潮、南天の葉(お祓い用)、半紙をお供えする。祭壇は東側に作り、西から東に向かつて拝むようにしているが、組によって多少の違いがある。半紙は住職に渡し、次の年の御札を作ってもらう。



写真46 神棚

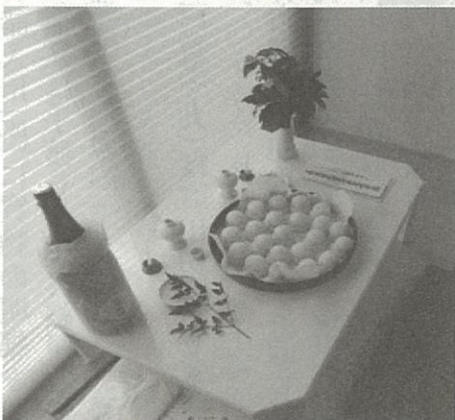


写真47 お供え物

御祈祷は仏式でしている。真言宗智山派、金蓮寺の住職が午前八時頃より順次各組の宿元を回り、お祓いとお経を上げ

て、家内安全、組内安全を祈願する。家内安全の御札を組内全戸分と組中安全の御札を四枚いただく。組内安全の御札は組の東西南北境界の四角に立てる。

当日は、各組とも各戸一名が参加、宿元で住職のお祓い、お経が終わった後、料理店へ行つて食事をして懇談を行つてゐる。料理は一人前が四千円から五千円程度である。組によつては夫婦で参加し新年会を兼ねてにぎやかに行う。

また、ある組は、お茶とお菓子のみとし一時間程度で簡単に終わっている。以前は、鏡餅を一組作り、御祈祷の後各戸数に切り分けていたが、今では小さい鏡餅を戸数分作り宿元が大きい鏡餅を切り分けることもなくなっている。

(四) 御祈祷内容の変遷

一五年くらい前は、宿元は現在同様の祭壇を準備し、当日はお昼前に宿元に集まつて今年度の組内の役員と来年度の宿元などを決めて昼食をとり懇談する。昼食は料理店より仕出しをとり、一人前が三千円から四千円くらいである。昼食後適当な時間に鏡餅を全戸分に切り分け御札とともに全戸に配り、お神酒をいただいて解散する。

昔の東古泉は、「お日待祈祷」といつて二日間行つていた。御祈祷の日は、毎年一月一九日・二〇日に決まっていた。宿元は宿を貸すだけで参加者(男性のみ)は全員宿元に泊まる。この時の祭壇は「吊り祭壇」(神棚を天井から吊るす)で、南北の方角に吊るす。祭壇には一五年前と同様に、注連縄、ホンダワラ、鏡餅、洗米、海潮、南天、しきみ、半紙を置いていた。一月一九日は東側から西に向かつて祭壇を拝む。一月二〇日は西側から東に向かつて祭壇を拝む。食事は野菜などは各人が持ち寄り参加者が料理を作る。一九日は宿元に参加者全員で泊まり一月二〇日の日の出を拝むので「日待祈祷」と言つ

ていた。しかし二日間は長く、宿泊のため寝具も宿元の手持ちでは不足で各自で持ち込む等大変な手間なので、一日の御祈祷になり、その後、生活習慣の変化、仕事の都合等により一月二〇日に近い日曜日になり、東古泉は一月の第三日曜日に地区の総会の後で御祈祷をするようになった。また、いつの頃からか注連縄とホンダワラに加えて紙垂を付けるようになった。

(五) 御祈祷の記録

御祈祷の資料として残っているのは、南組に「入用帳」として残る明治二六(一八九三)年からのものが最も古く、一年分は半紙を二つに折りにして三枚程度をコヨリで綴じた簡単な記録である。内容は宿元名、出席者、お布施や食料費等の費用明細を記入、そのほかに地区の状況、感想等を記入している年もある。



写真48 明治26年からの「御祈祷入用帳」



写真49 明治26年「入用帳」の表紙と記載内容

1 お布施の金額
お布施の記録は、明治二六年五銭、明治四〇年一〇銭、大正

九年二〇銭、昭和一八年七〇銭、昭和二十一年一円、昭和二十三年二五円、昭和二十八年百円、昭和三八年二百円、昭和四九年八百円、昭和五九年四千円（賄い料含む）となっている。

平成八年からは、お布施五千円、賄料二千円となり現在も同額である。

米価格は、大正八年には、白米一升四六銭、麦一升二六銭、昭和一五年には、玄米一俵四二円六〇銭、麦一俵一二円との記述がある。

2 食料品の価格

明治二七（一八九四）年の料理材料を見てみると、椎茸、揚げ、酢三合、ひりこ（いりこ）人参、豆腐、お神酒等であり、費用は合計三二銭二厘で、参加者八人で割ると四銭二厘となる。質素な食事だが、当時としてはご馳走と思われる。

3 その他の記録

「入用帳」には、諸費用や参加者の記録のほか、記録者の感想等も書かれている。これらの一部を紹介する。

○明治二六年には「此年諸講合併シテ正月五ヶ日ニ素我（鷲）社（東古泉の鎮守社）ニ於テ字中一同神主ヲ還ヘ御祈禱ヲ致事ニ相成候今年ヨリ始ムル」とあり、この頃は神職が御祈禱を行っていた。

○明治三一（一八九八）年には「地方税」として御祈禱参加者が一人当たり「七銭」程度を支払っている、これは大正の頃まで記述がある。この「地方税」についての詳細（意味）は不明である。

「御祈禱」のまとめを終えて

北伊予地区では、永田地区を除く八地区で「御祈禱」が行われているが、その内容は、地区（大字）や同じ地区内でも組によりかなり異なるため、私たち北伊予の伝承編集委員会では、各地区の御祈禱の起源や現状などについて、古文書や聞き取りなどから、改めてまとめたものである。

まず、文政年間（一八二〇年頃）に「大般若波羅蜜多經」六百巻を徳丸・神崎・鶴吉・大溝など多くの地区で祈禱用に購入していることや「入用帳」の記録などから、その頃が起源と考えられる。

また、実施内容を見ると、地区によってかなりの差異が見られるのは、かつて大字は藩政時代、松山藩の「村」であり、独自の自治活動や年中行事を行ってきたことによると考えられる。

御祈禱は、ところによれば「お日待ち」や「氏神講」と呼ばれ、かつては二日間にわたり行われていた。

北伊予地区内で、現在、宮および寺祈禱の両方で祈禱を行っているのは中川原・出作・鶴吉の三地区のみである。宮祈禱は中川原・鶴吉は田休み時期の初夏に神職を迎え行うが、出作では正月に行う。他は新春に住職を迎えて行う寺祈禱が中心をなす。

時代の進展に伴い、実施状況も大きく変容し簡素化してきた。その変容は、藩政時代から脈々と書き記された「入用帳」や「宿覚帳」などの資料からも明らかである。

近隣関係が希薄化しつつある今こそ、本来の御祈禱の趣旨を改めて見つめ直し、伝統ある固有の地域文化として継承していきたいものである。

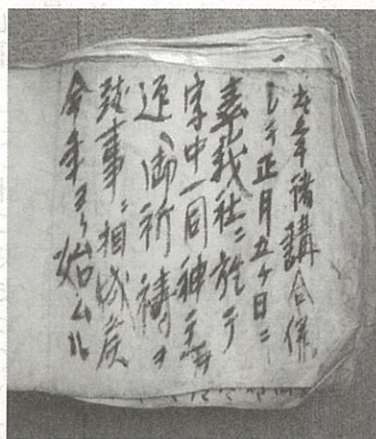


写真50 明治26年「入用帳」の記載内容

○明治三七年には「本年二月七日ヨリ日露戦争アリ 仁川及旅順海戦ニ於テ連戦連勝ス 依テ我國民 軍事債券応募ニテ當字内ノ金額〇〇円ヲ應ジタリ」の記載がある。

大正時代になると記載内容がずいぶん様変わりしている。

○大正七（一九一八）年には「時ハ正月二十日ノ午後ノ二時解散時期ニ地方税ノ牛肉ノト 彼是面倒ノ事 米 二升 鯨（皮鯨）二百匁 ハハハ……」と笑いとばし……

○大正八（一九一九）年には「榮三郎様（宿主）乃羽釜ノ御祈禱デ 面倒至極……」と面倒がつた記述がある。

よき大正時代の大らかな雰囲気を感じることができ

（六）これからの御祈禱

現在は年長者が元気な組は従来通り行い、そうでない組は簡素化、またはやめている傾向がみえる。将来はなくなっていくかもしれない行事ではあるが、簡素化し少しでも永く続けていこうと努力しているのが現状である。

○これらの内容は 早瀬辰郎さん（昭和三年生まれ）、三好國榮さん（昭和一七年生まれ）、森下昌隆さん（昭和一八年生まれ）、三好則雄さん（昭和二七年生まれ）に協力してもらった。

各種資料については、東古泉の最も古い組の一つである南組で、明治二六（一八九三）年から連綿と書き綴られている「御祈禱入用帳」から引用した。

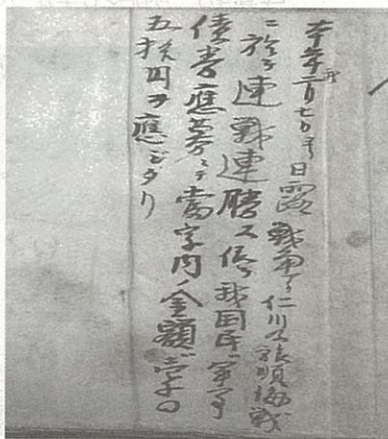


写真51 日露戦争の軍事債券に応募した記録

『北伊予の伝承 第13集』

平成 28 年 3 月 発行

発 行 松前町東公民館
〒791-3161
愛媛県伊予郡松前町大字神崎210番地
TEL 089-984-1159

編 集 北伊予の伝承 編集委員会
刷 印 (株)プロックス
〒791-3142
愛媛県伊予郡松前町大字上高柳383番地4
TEL 089-985-3339

『北伊予の伝承 第13集』 編集委員

委員長	神 崎	高 石	勤
副委員長	徳 丸	仙 波	康 宏
副委員長	出 作	小 松	ヒトミ
副委員長	大 溝	田 中	安 男
副委員長	永 田	澤 田	忠 夫
委 員	徳 丸	伊 藤	芳 幸
委 員	神 崎	深 沼	静 良
委 員	鶴 吉	久津那	博
委 員	鶴 吉	済 川	誠
委 員	横 田	松 田	康 徳
委 員	東古泉	早 瀬	明
委 員	東古泉	竹 田	頼 夫

(事務局) 東公民館長 門 田 博
主事 卷 幡 信次郎



編集委員と事務局の皆さん



この冊子は、資源保護と環境に配慮して
大豆油インキ、再生紙で作成しています。